

ロータリー随想

その周辺とともに

菅生浩三

1993年4月

個人と社会とを

ロータリーのサービスの理念で結ぶ

ロータリアンが綴る珠玉の小編集

はし が き

一九六九年に大阪北ロータリークラブに入会させて頂いて以来、ロータリーとは何か、「奉仕の理想」と邦訳される「Ideal of Service」というロータリーの理念が、人間とその社会に一体どのような意味を持っているのであろうかという素朴な疑問は、私の脳裡を離れることはなかった。そこで、折に触れて優れた先輩ロータリアンの皆様のご教示を乞い、また、私自身も拙い思いを重ねて今日に至った。なかんずく、一九九一〜九二年度国際ロータリー第二六六〇地区のガバナーを拝命することとなり、私なりに考えを纏めておく必要に迫られたし、また、年度の体験を通じてある程度考えが固まったものも出て来た。さらに、年度内の会合などで、色々な方々から数々の貴重なご意見を頂戴した。そこで、これらの成果を、一九八七年以降クラブの会報や「ロータリーの友」に掲載して頂いたり、

ガバナー月信に発表したり、一九九一年四月から一九九二年九月にかけて「ロータリー随想」の標題のもとに数冊の小文集に取り纏め、先輩友人のロータリアンの皆様や地区のロータリアン各位にお届けしてご指導ご叱正を乞うていたが、今般おすすりもあつて、若干の手を加えたうえ、一冊の本に纏めることとした。

あらためて通読すると、論調の粗忽かつ独善的な運びはいうに及ばず、内容の貧困や表現の生硬は如何ともし難いうえへ幾多の考え違いや矛盾や大切な論点の脱漏も目につく始末で、自らの未熟さに目を覆いたくなる次第であるが、心貧しいロータリアンの試行錯誤の一里塚としてご笑読頂ければ、望外の幸せである。本書の上梓にあたり、幾多の貴重なご指導やご助言を賜った諸先輩ロータリアンの皆様のご厚情に深く敬意を表するとともに、万端のお世話を頂いた株式会社朝日カルチャーセンターの小倉淳平氏に心から感謝申し上げる次第である。

一九九三年二月

菅 生 浩 三

目次

はしがき 1

I ローターリーを考える

何故にロータリーなのか 8

ロータリアンに期待される現在の課題 10

ークラブ公式訪問における挨拶からー

奉仕(サービス)の理念の統一的理解 22

ロータリーの手法に関する独善的見解 26

アイ・サブかウイ・サブか 30

II クラブの内部活動を考える

ロータリーの親睦 36

ロータリー情報 39

規定と情報の価値 44

会員増強と拡大 46

質か量か 49

卓話のプログラム 53

ロータリーの雑誌 55

ロータリーの広報 59

Ⅲ 職業とロータリー

職業の倫理 64

職業奉仕についての若干の考察 69

職業奉仕の新しい側面に関する一つの提言 75

Ⅳ 国内的な社会とロータリー

社会奉仕に求められる現在の視点 82

心の環境障害 88

社会奉仕をめぐる諸問題への対応 93

— 地区地域対策合同委員長会議を通じて —

大学における教育と研究の課題とロータリーの役割について 112

— 地区大会の大学問題シンポジウムを契機として —

青少年への奉仕 120

V 国際的な社会とロータリー

国際奉仕と世界理解についての若干の考察 124

国際奉仕をめぐる若干の視点 129

国際間の交流と理解 133

今後の国際理解に向けての手法のあり方 138

VI ロータリーをめぐる雑感

二つの説 144

一粒の麦	147
時局放談	149
ロータリー妄想	154
人間の顔	156
競争の功罪	158
生きるための二つの視点	163
生きることの意味	168
現今の世界が当面する二つの課題	173
人間の資質とサービスの理念	180
企業活動とロータリー	183
世情雑感	185
経営の危険要因の増加と企業の社会的課題	193
奉仕の現代像への幻想的考察	203
今後におけるロータリーの存在意義についての一つの意見	209
著者略歴	215
電子文庫版について	216

I ロータリーを考える

何故にロータリーなのか

人は皆、まず自らの幸せな生き方を求めることができる。このことは、いうまでもなく近代思潮の原点であろう。ところが、同時に、人は、周囲の人々の幸せなくしては、自らの幸せを手に入れることはできない。このことも、現代の大多数の人々がすでに確信を以て理解しているところである。人の世の幸せには、人の心が深くかかわっているからであろう。従って、人は、自らが幸せになるに伴って、周囲の人々を幸せにするように努めなければならず、また、周囲の人が幸せになるに伴って、自らもさらに幸せになって行くことができるのであろう。

このようにして、人は、自らの幸せを手に入れるためにも、自らの周囲の人々に色々な働きかけをして行くことになるのであろう。その周囲の人々の範囲も、家族や地域社会から始まって、一国の国内社会から国際社会へと拡がって行くの

であろう。

ところで、このような考え方は、人間とその生き方にかかわる普遍的な考え方であって、何もロータリーだけに独特のものではない。しかし、ロータリーの特色は、このような考え方に対応するにあたり、極めて適切かつ効果的な組織と独自の奉仕活動の手法を採用しているところにあるのではないかと思われる。私どもが、ロータリーに入会して、ロータリアンとして活動することに生甲斐を感じる所以である。

(一九九〇年七月)

ロータリアンに期待される現在の課題

—クラブ公式訪問における挨拶から—

私は、日本のロータリアンが現在ほど本格的なロータリー活動をしつかりと実行して行くこと、換言すればロータリー活動の真の意味における一層の活性化をはかるように努力することを求められている時期はないと思う。そして、そのことを明らかにするため、とりあえず次の三点について、具体的な問題の指摘を試みたい。

一、まず、第一点は、私どもはロータリーを真の意味で理解しているであろうかという問いかけである。換言するならば、私ども会員の一人一人が、ロータリーへの真の理解をさらに深めるべきではなからうかとの提言である。

私どもは、ロータリーのことを一応知っているように思っている。しかし、果たして大丈夫であろうか。知識としてのロータリーを詳しく知っていても、それ

が直ちに真にロータリーを理解していることにはならない。何故ならば、ロータリーは、人がこの社会に生きて行くための基本的な考え方や取り組み方の問題であり、換言するならば、社会に関する意識や思想の問題ではないかと思われるからである。

ご承知のように、ロータリーは、我が日本ではなくアメリカで生まれた。アメリカは、アメリカの人達が自分達で作った国であるという意識、すなわち当事者意識のうえに成立している国で、個人は社会に一定の利益を期待し要求することができるという権利の意識が明確である反面、人間の社会は人々の色々な需要を充たしていることが必要であるし、またそのまま放置しておけば徐々に質が低下して行くものであるから、自分達の責任で不断に社会のために職業上の便宜を裕めとして色々な成果を提供して行く義務があるという責務の意識も明確であるということ、個人と社会との関係がごく自然に「サービスの理念」という考え方によって結ばれているのであろう。ところが、日本では、生まれてみたらまたまた日本であつたということ、どちらかといえば社会は人間を容れる巨大な容器

であつて個人とは別に存在し、個人が押そうが引こうが大した影響もなく、個人は周囲を見渡しながらこの社会に上手に適応して生きて行くことを最善とし倫理とするという適応意識に重点があつて、社会意識の面でアメリカとは根本的に異なつており、そこには元来サービスといつた觀念が存在していない。そこで、日本ではこの「サービス」という「理念」を、やむをえず「奉仕の理想」などと訳しているが、受け止め方によつては全く似て非なるものを心に描いていることになりかねない。アメリカにおいては、社会意識としてはアイ・サーブはむしろ自明の理で、すぐにウイ・サーブの行動にとりかかつた方が効果的だなどという議論が成り立つのであるが、日本では、先ずしつかりとアイ・サーブの考え方の基本の理解から始めなければならぬということであろう。

大正九年、敬愛する米山梅吉氏によつて、このようなアメリカの「サービスの理念」がロータリーの衣に包まれて日本に持ち込まれたが、その後七〇有余年の時の経過は、ロータリアンを中心とする日本人の社会意識の变革に何らかの成果を与えたであろうか。否定的な見解が有力で、そこに問題の基本となる大切な視

点があるのではないであろうか。「サービスの理念」とは何物であり、何故にそのようなことを考える必要があるのかという疑問への理解が、すべての出発点になるのではないかと思われる。そうでなければ、私どもは何のためにロータリーに入会し、サービス活動をしなければならないのかという原点が納得して理解できないであろうし、そのようなことでは、本格的なロータリー活動やロータリー活動の真の活性化などは到底望めないと思うのである。ロータリーアクトやインターアクトの活動やいわゆるボランティア活動が真の意味でなかなか日本の社会に定着しないという現実には、社会の問題は自分達の手で責任を以て最終的に解決しなければならぬという当事者意識と「サービスの理念」の底流が存在しなければ成り立たないものであることに思いをいたすとき、この疑問への厳しい例証となるものと思われる。

二、次に、第二点は、私どもは、ロータリーのサービス活動の現状を具体的によく知っているであろうかという問いかけである。換言するならば、私ども一人一人がもつとロータリーのサービス活動の現状の認識を深めて共有するように努

めなければならぬという提言である。

私は、もともと大変不勉強なロータリアンで、ロータリー財団の国際親善奨学生、ロータリー米山記念奨学会の奨学生、研究グループ交換（GSE）、国際青少年交換、ロータリー青少年指導者養成プログラム（RYLA）など、どのような活動がどのようにして実施されているのか、また、関係のロータリアンの方々がどのようにご苦労をなされているのかを殆ど知るところがなかった。今回過去二年余に亘り、各種地区委員会の活動を拝見させて頂き、及ばずながら勉強させて頂いた結果、サービス活動の現状をある程度具体的に認識し理解することができようになったが、同時に、このような現実をご存知のロータリアンが意外と少ないのではないかとも感じるようになった。例えば、私は以前はロータリー財団の活動の実情を知らずにいわれるままに寄付をして、それで結構良好なロータリアンなどと自惚れていた。しかしながら、それだけでは、私の行為はいわば単なる経済的な出稼行為にすぎず、サービス活動とはいえなかったわけである。サービス活動の実情を知らずしては、その目的や価値の認識なくしては、本格的

なサービス活動は存在しないかも知れない。それに、サービス活動の自覚なくして、果たしてサービスへの意欲が真に湧いて来るものであるうか。ロータリー活動の真の活性化の第二の条件は、ロータリアンの一人でも多くの方が、現実に行われている活動の現状と意味を、少しでも多く少しでも具体的に知って頂くことであると固く信ずるものである。

三、最後に、第三点は、ロータリーは今のままでいいのであろうかとの問いかけである。換言するならば、私も一人一人が、社会的な諸問題の現実をよく認識し、これらに対するロータリーのサービス活動の現在及び将来のあり方についてなお一層の検討と対応のための準備を始めるべきであるとの提言である。以前のように、静かで安定した社会にあつては、ロータリーの活動も静かで安定した活動で十分に社会の需要を充足していただであらう。しかし、現在私どもが生きている時代は大変な激動期で、人によつては二、三世紀に及ぶ変化を僅々五年か一〇年で達成してしまう時代だといわれる。このことは、その原因によつても裏付けられるであらう。

例えば、まず、私どもの生活を支える社会や経済の基盤が根本的に変わりつつある。従来の私どもの生活は、人間の自由と競争を前提とした資本主義やその弊害に対する対症療法としてのその修正的な手法と、その前提自体を否定する実験としての社会主義やその修正的的手法との二極対立の構造の上に成り立っていたが、現在、当然の歴史的経過として社会主義的な手法が否定され消え去ろうとしており、そのあとは、世界的規模で地域の実情に応じ多様な市場経済の修正主義の手法が適用されて行く多極化対立の構造の世界へと変革しつつあり、この移行に伴い、私どもの生活も根本からの変化を遂げて行くと思う。

次に、底知れない科学技術の開発である。いわゆる環境問題は、これだけを単独に取り上げることは、一面的であり対症的である。科学技術の開発と環境問題とは一枚の板の表裏であり、両者を一体のものとして観察し評価し判断をしなければ、正しい理解と処理を失する憐れがある。現在では、環境の面で地球が危ないと指摘される程度に科学技術のともどもない開発が進められているものと考えるべきであろう。科学技術は、本来は欧米的資質の一部の拡大にすぎないと思う

が、感覚的な快適生活を追求する人間の本能に直結しているために、殆ど無倫理的に開発が進行し、むしろ止めようもない状態で、私どもはその先端情報など殆ど知らないというのが実情であろう。このような科学技術の開発が今後私どもの生活にどのような変化を与えて行くかは、想像を絶するものがある。

最後は、私どもの心の変質である。私どもは、私どもの心の環境が過度の競争体質によって余りにも多くを占められており、そのために深刻な障害を惹き起こしている事実から目を背けることはできない。私どもは、物心がつくや否や、成人までの大切な精神形成期を、人間の資質の一部にすぎない知能を病的に磨き上げる激甚な画一的競争教育の渦中に投げ込まれて過ごすことを余儀なくされる。次いで、行政であれ企業であれ専門職業であれ、強固な管理組織に支配され影響された内外のより激甚な競争体質社会の中に埋没して、一生を過ごさざるを得ない。そして、遂に殆ど自身と家庭を顧みるゆとりもなく一途に職業生活を終えてみれば、自己を持たない一握りの生身の粗大ゴミないしは産業廃棄物と化し、最も困難な高齢者対策の対象となり下ることとなるのではないかという、笑えない

話も巷間ささやかれている。個人的資質には社会的資質としての側面があるし、私どもの其の資産は健康と時間であるし、自己のない高齢者ほど悲惨なものはないし、私どもはこのようなことをよく理解しながら、なおこれらの側面に目をくれるいとまもないのである。そして、その結果、私どもの心は、私ども自身や他人や社会に対する正常な関心と価値観を失い、心の変質というかつてない深刻な問題に直面している。しかも、この問題は、性質上、当該本人は自覚できないという致命的な側面を持っているのである。

そこでロータリーは、これらの急激に迫り来る社会的諸問題の解決のために何か働いているのであろうか。私どものロータリー活動のこれらの問題への対応は、果たして十分であろうか。むしろ、何もしていないのではないか、殆ど無関係ではないかとの声も多く聞かれる。もちろん、そのような問題は専門の行政に任せおけばよいので、素人である私どもロータリアンが一々出て行く必要はないという有力な反論もある。しかし、行政というものは、確かに立派な成果をあげる社会的手段であり、なかんずく我が国の行政は、世界超一流の能力を有している

が、性質上どうしても縦割りの機構と予算に合わせて画一的事務的にしか問題を処理することができないし、外からの解決に終わるといふ手法上の限界もある。ところが、私どもが対面する各種の問題は、行政機構に合わせて起ころるものではない。すべての問題を問題自体としていわば個人的に取り上げ、しかも心の内からの方法を用いなければ、真の解決とはならない。従つて、社会的諸問題の解決は、結局は社会の構成員自身による不断の自助努力がなければ最終的な解決には至りえないといふ古来の真理が、今日ほど必要とされる時期はないと思われる。しかも、当事者意識が稀薄で適応意識が主流となつてける日本の社会で、果たしてこのような解決の方法が可能なのかといふ根本的な疑問も否定できない。私どもロータリアンは、「サービスの理念」を掲げ、このような自助努力の中核的行動を担つて行く者として、自らの存在の価値の自覚を新たにする必要があり、そのためには、私どもは、私どもを取り巻く広狭さまざまの社会問題の現実への認識を深めるよう努力を傾け、その対応のあり方の検討とそのための必要な準備に着手しなければならない。ロータリーの今日的存在意義と真の意味の活性化は、

この検討と準備のすみやかな着手によつてのみ、その将来を保証されると考えるものである。

世界的規模における人間社会の政治、社会、経済情勢や価値観の変動は、まことに目まぐるしいものがある。人間の顔を求めて発足した社会主義の手法も、多年に亘る歴史的实验を経て、漸くその使命を終えようとしている。しかしながら、社会主義的手法の否定は、そのまま資本主義やその修正的手法その他の在来手法の肯定を意味するものではない。問題が振り出しに戻っただけである。私どもは、私どもの生甲斐と幸せを求めするために、あらためて原点に立ち戻り、個人と社会のあり方に思いをいたし、人間の自由の尊重と新たな価値観の確立と競争の正しい内的制約の構築に努めつつ人間の顔をした社会の実現に努めて行かなければならない。その意味において、「綱領」「サービスの理念」「四つのテスト」などに集約されているロータリーの思想の存在意義が、今日ほど強調され期待される時代はないのではないかと思う。何故ならば、ロータリーこそは、現実の社会にしっかりと根を下ろしつつ根底から人の心を扱うものであり、これ以外に人間社

会を現在の破滅的状況から救う手段はありえないかも知れないからである。私どもは、思いを新たに、相ともに手を携え、私どもの社会を大切にいとおしみなながら、この社会の地の塩となり、この社会に一粒の麦を播き、真の意味におけるロータリー活動の活性化のため、本格的な努力を重ねて行かなければならないと思うのである。

(一九九一年六月)

奉仕（サービス）の理念の統一的理解

いうまでもなく、人は、個人としての日々の幸せな人生を求めて実現し享受できることは当然で、むしろそのために人は存在しているのであるが、同時に人は、自己の周囲の人々や社会の恩恵なくしては一刻も生きることができないことも真実である。否、むしろ、私どもの精神や財産の存在の殆どの部分が、社会とその恩恵によって構成されているといっても、過言ではない。人間は社会的動物であるといい、社会性をその本質とするというのも、そのような見地からである。従って、私どもは、社会からその恩恵を受け取ると同時に、自己の言動の成果を社会に提供し還元して行くという社会的な責務を負っていると考えるなければならない。何故ならば、社会は有限であるし、その構成員の不断の努力によって良好な状態を保持しなければ、結局は構成員である私どもの生活自体が低質なも

のとなり、私ども自身が不幸せとなるからである。社会から自分勝手に気ままな収奪をしておいて、あとは自分以外の誰かがその後始末をして社会のお守りをしてくれるであろうと期待するなどという安易な考えは、人間としての基本の倫理を欠いた見解というべきであろう。

このように、社会は私どもによって構成されるものであること、そして私どもは社会の当事者たる立場に立つものであることを自覚するとともに、社会に対して自己の言動の良質な成果を提供して行く基本的な責務を負うことを厳しく自覚し、このような自覚の上に立って社会に向けて具体的な行動を行うことを奉仕(サービス) というべきであろう。そして、このような奉仕(サービス)は、一括して、広義の社会奉仕として、一般に理解し呼称すべきものであろう。職業奉仕は、自己の職業を通じて行う社会奉仕である。狭義のいわゆる社会奉仕は、地域社会における社会奉仕である。国際奉仕は、国際社会における社会奉仕である。もっとも、国際社会における奉仕にあたっては、その前提として、言語、生活習慣、価値観、政治、経済、社会の各状況の相違などに起因する幾多の障害を克服し解決

しなければならぬために、特別の工夫と努力とが必要となるが、その本質がグローバルな地域における社会奉仕にあることに、疑いはない。青少年奉仕は、次代を担う青少年層への社会奉仕である。クラブ奉仕は、このような社会奉仕活動を行う集団を適切に構成して維持発展させるための基礎作業にかかる奉仕である。このようにして、ロータリーの奉仕活動は、広義においては、すべて社会奉仕たる実質を持つものと統一的に理解できるものと考へる。ロータリーの金看板は職業奉仕であるという指摘は、性格論としては適確であると思うが、それ自体で本来的な社会奉仕自身であると言い換えた方が、平凡ながらより平均的に適切な表現であるかも知れないと思うのである。

ただ、ロータリーが発生したアメリカは比較的新しい国で、国民の間で、自分の社会は自分達が作った社会で自分達が当事者であるという意識が、比較的はっきりしているのではなからうか。従って、ロータリーのいう奉仕（サービス）の觀念も、むしろ当然のこととして人々にごく自然に受け入れられる素地があるのではなからうか。これに比して、我が国では、私どもが生まれてみたらまた

ま日本であつただけで、日本の社会は、個人とは別に存在し、今後も独自に存在を続けて行く大きな組織体で、私どもが多少収奪しようが貢献しようが大した影響もなく、私どもはただ社会への適応だけを考へて上手に生きて行けばいいのだといった意識が支配的なのではなからうか。従つて、当事者意識が比較的稀薄であるから、日本のロータリーの活動は、まず奉仕（サービス）の觀念の自覚と理解から念入りに始めなければならぬのかも知れない。日米双方のロータリーで、アイ・サーブとウイ・サーブの重点の置き方に微妙な違いが見られるのも、案外このようなところに原因があるのかも知れない。

最後に、奉仕（サービス）を人の社会的責務として理解するだけでなく、進んで人間の社会性の充足としての見地から理解して、個人としての幸せを享受するために絶対に必要な条件としての価値付けを行うべきものであるとの見解があることを付言しておきたい。

（一九九一年二月）

ロータリーの手法に関する独善的見解

ロータリーが採用し実行している色々な組織や活動を見渡してみると、そこには何かしら共通したロータリーらしい手法が存在するように思われる。その幾つかを、次に摘記してみたいと思う。

まず、ロータリー活動における「強制」である。私は、ロータリーの組織と活動は、自発的要素と強制的要素とが複合して成り立っていると思う。例えば、会費の支払はもちろんのこと、例会、フォーラム、懇親会その他各種会合への出席と参加、ロータリー情報の研修、雑誌の購読、会員増強や広報の責務、各種の寄付その他各部門に亘る本格的なサービス活動の計画と実行の責務に至るまで、その確保が強制によって裏付けられているといっても、過言ではない。ただ、その強制は、ロータリアンは自他の幸せのために、また社会のために必要なことをし

ているのだという確信や、強制自体が自発的意思と共にあり、また自発的行動の契機となるものであるという確信によって裏付けられているものである。従って、その強制は、ロータリーらしい強制であることが求められるであろう。出席の競争や各種の表彰からニコニコ箱の名称などの工夫に至るまで、色々な手法がこのような見地からは認められ推奨されるであろう。「ロータリーの友」をフォーラムの素材に使うという手法も、雑誌の購読を強制するという見地から、まことにロータリーらしい巧みな手法といえるであろう。ロータリー活性化のための一つの視点かと思う。

次に、ロータリー活動における「循環」である。親睦が広まり深まれば、出席がよくなるであろう。出席がよくなれば、ロータリー情報が徹底して行くであろう。ロータリー情報が徹底すれば、サービス活動が活性化するのである。サービスの活動が活性化すれば、親睦も広まり深まるであろう。この道の循環も可能であり、極めて有益である。また、右以外の色々な循環も考えられる。このように、ロータリー活動は循環する。よい方に循環すれば、ロータリー活動は自然と活性

化するであろう。悪い方に循環すれば、ロータリー活動はとめどもなく低調なものになるであろう。ロータリー活性化のための一つの視点であろうかと思う。

最後に、ロータリー活動は、その仕上げの段階で、サービス活動の「受け皿へのサービス」を必然的に予定していると思われる。例えば、ロータリーのサービス活動は、物のサービスでなく、心のサービスであるといわれる。サービスを行うロータリアンと受けて頂く人々との間の心の交流を前提とするからであろう。心の交流は、サービスを行うロータリアンからサービスを受けて頂く人々へのロータリーへの理解の働きかけによって成立する。いわば、ロータリーのサービス活動は、受け皿である人々のロータリーへの理解によって完成するものであり、サービスを行うロータリアンは、その受け皿である人々にロータリーへの理解を提供すべきサービスを行う責務を負っている。広報がロータリアンの個人的基本責務だとされる所以の一つであろうと考える。また、青少年の世代は、私どもロータリアンのロータリー活動全体の継承世代である。従って、ロータリーの青少年へのサービス活動は、ロータリーの受け皿へのサービス活動の最も包括的で重

要な意義を持つものというべきである。このように、ロータリーがサービス活動の受け皿に至るまでサービスを予定しその徹底に努めているということは、ロータリー活性化のための一つの視点であろうかと思うのである。（一九九二年七月）

アイ・サーブかウイ・サーブか

社会の中においてのみ生きて行くことができる私どもは、社会を構成する当事者として、社会が提供する利益を享受できる反面、職業を通じてまた一般の社会的活動を通じて自己の言動の良質な成果を社会に提供して行く基本的な責務を負うことを自覚し、このような自覚の上に立つて、この責務を社会に向けて果たすための具体的な行動を行うことをサーブスといふべきであろう。アイ・サーブとはロータリアンが個人としてサーブスを行うことを意味し、ウイ・サーブとはロータリーがクラブや地区や或いはR I（国際ロータリー）などのロータリアンの集団としてサーブスを行うことを意味することは、いうまでもない。ところで、アイ・サーブかウイ・サーブかは、ロータリーの世界、なかならず我が国のロータリーにおいては、古くて新しい論題である。近時における職業分類の軽視とか量

のみに傾いた会員増強や拡大などの傾向に加え、先般R Iが職業奉仕における新方針を定めたことや、社会奉仕活動における方針を定めた決議二二―三四を廃止しようとする動きがR Iにおいて最近に至るまで根強く継続したことや、三HPプログラムとかポリオ・プラスなどの巨額の資金調達を前提としたR I主導の広域的で継続的な大規模サービスマス活動の企画と展開が相次ぐ現況にあることなどの当否をめぐって、ますますその論議がより厳しい形で行われつつあるものようである。

ところが、アイ・サーブかウイ・サーブかは、色々な段階で取り上げることができる論題であつて、どの段階における問題として論議しているかの立場を明らかにしておかなければ、論議が噛み合わないこととなるのではなからうか。例えば、私どもの内心における価値観とか行動基準がどうあるべきかを考える理念の段階において論議するのであれば、私ども一人一人がサービスマスの精神を自覚してその自覚の上に立って行動すべきであるということであつて、論議は性質上アイ・サーブに尽き、ウイ・サーブを論ずる余地は殆どないであろう。しかしなが

ら、さらに進んで、サービスを実行するにはどのような手法によるべきであるかを考える段階において論議するのであれば、一人一人が個人として実行すればよいとか或いはそうすべきであるというアイ・サーブの考え方と、クラブとか地区とかR Iといったロータリアンの集団として実行すればよいとか或いはそうすべきであるというウイ・サーブの考え方とが出て来て、いずれを原則とすべきか、いずれが正しいかという論議に発展して来るのではないであろうか。そして、アイ・サーブの手法によれば、サービスの行動に伴い、個々のロータリアンのサービスの理念への自覚も深まり、また極めて良質のサービスが期待できる反面、個々の個人的サービス活動だけではその成果の社会的な拡がりや効果が必ずしも十分には期待できないかも知れない。ウイ・サーブの手法によれば、十分な社会的拡がりを持って効果的なサービス活動が遂行され、社会的にも技術的にもまた意識の面からも世界的規模で激動し激変する国際社会に生起する新しい時代の幾多の諸問題にロータリーとして適確に対応して行くことが期待できる反面、ロータリアン個人としてのサービス活動への意欲を低下させ、ひいてはサービスの埋

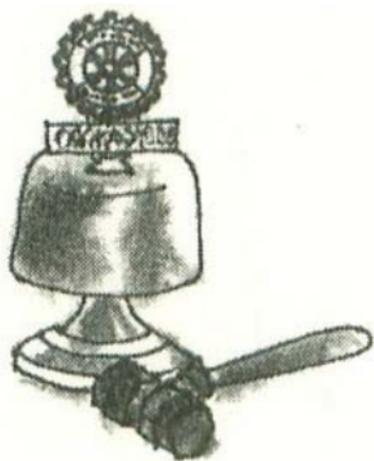
念への自覚や理解への機会を減少させるだけでなく、サービズ活動自体も画一的で量的な成果のみを求めて心を伴わないものとなる事態が起ころことが予想されないわけでもないかも知れない。

結局において、私どもは、理念の面では、アイ・サーブの精神を堅持しつつ、実行の面では、アイ・サーブの手法とウイ・サーブの手法のいずれか一方に偏することなく、それぞれの手法の陥り易い欠陥に深く配慮しながら、それぞれの手法の持つ長所を生かし、問題の個性と特質に適合するよう二つの手法の適切な配分に努めて行くべきではないかと考ふる次第である。

ちなみに付言するならば、欧米社会のように、サービズ理念が当然の社会意識として比較的定着している社会では、理念の面でのアイ・サーブの考ふる方をさほど強調する必要が少なく、いきなり実行の面でのアイ・サーブとウイ・サーブの各手法に入って行けばよいのかも知れない。しかしながら、我が国などのように、サービズ理念が必ずしも社会意識として十分には成熟していない社会では、まず理念の面でのアイ・サーブの考ふる方から注意深く大切に育てて行かなければ

ならず、その辺にアイ・サーブかウイ・サーブかの論議の存在意義があるのかも
知れないと思うのである。

(一九九二年四月)



Ⅱ クラブの内部活動を考える

ロータリーの親睦

ロータリーにおける親睦(Fellowship)が、ロータリアンが知り合いを広め深めることにより友情を育て仲間意識を高めてサービス活動に携わる心の基盤を相互にしっかりと確かめ共有することであること、そしてロータリー活動の成立と活性化の基本的条件であることは、いうまでもない。

現実には、長い時期に亘るロータリー活動の歴史を通じて、ロータリーにおける親睦活動の中核的会合である会員懇親会、家族会や、その外延に位置する任意の同好会、趣味の会や、世界的規模における世界親睦活動や、ロータリー情報提供の要素を加えた従前の炉辺会合や現在の家庭集会などに至るまで、概ね一定の型が定着して来ており、大体においてクラブの選択に任せられている現状にあると思われる。ただ、私は、このようなロータリーの親睦について、次のような問

題を指摘してみたい。

まず、多くの会員のくまない参加が必要であるということである。出席者が少ないことが問題であることはもちろんだが、仮に相当数の会員の出席がみられたとしても、常に特定の会員しか出席しないとか、又は常に出席しない会員が相当数いるといった事態は、決して望ましい状況ではない。早急に原因を調査し、適切な対策を講ずべきであろう。

次に、日本人の親睦の特色として、すぐに簡単に仲良くなるが実は心が相互に解け合っていない状態が比較的長く続くとか、案外に功利的な意識が潜在しているとか、真面目な時とそうでない時の落差が著しく中間状態に乏しいなどといわれている。このような状況は、仕事の面はもちろん、サービス活動の面でも、決して適切ではないと思われる。適応意識の社会にあっては、親睦活動すら適応への表面的手段として安易に消化されてしまうためではないかと思われる。根本的な検討が必要かと思う。

最後に、ロータリーにおける親睦は、いうまでもなく、サービス活動を通じて

の親睦を以て最良質とする。ただ、サービス活動を通じての親睦は、組織上各サービス部門に分散して実現されるため、親睦活動委員会が有効に把握して発展させる所となりにくい憾みがある。親睦活動委員会の特段の工夫と努力が要請される所以であろうかと思う。

(一九九一年七月)

ロータリー情報

ロータリー情報(Rotary Information)とは、いうまでもなく、ロータリーの成立とその発展及び現況の規模に達するまでの歴史、ロータリーの組織とその管理運営の実態、プログラムやプロジェクトその他の活動の実績と現状、「サービスの理念」を中核とするロータリーの性格と目的や考え方と行動の基準などを正しくかつ豊かに認識し理解するための素材ないし媒体をいうのであろう。このようなロータリー情報は、私どもが充実したロータリー活動を正しくかつ強力に社会に推進して行くために必要不可欠な精神的要素であると考えるべきであろうが、その提供にあたっては、次のような問題があると思われる。

まず第一は、ロータリー情報は知識ではなく考え方の問題であるという点である。ロータリー情報に通暁するとは、ややもすれば、「綱領」「職業宣言」「四つ

のテスト」を始めとする数々の標語、年度ごとのテーマ、「手続要覧」「ロータリーアン必携」「ザ・ロータリアン」や「ロータリーの友」や「RIニュース」「事務総長書簡」などの雑誌や刊行物、数々のパンフレット、ポール・ハリスの『ロータリーの理想と友愛』や『ロータリーへの私の道』など数々の先輩ロータリアンの著作などを読破して、その内容を知識として蓄積することであると誤解され易いであろう。もちろん、そのような情報媒体を読み、その内容を知識として正確に理解することは必要である。しかし、理解がそこでとどまってはならない。そこに内蔵されている考え方、すなわちロータリーとは何か、ロータリーは一体何を考え何を行おうとしているのかを真に理解しなければ、ロータリー情報の提供を受けた意味の大半は失われ、画龍点睛を欠くこととなるであろう。そして、子どもの理解がロータリーの考え方の域に達したとき、ロータリー情報は、私どもにとって、単純明快で分かり易く、いったん理解すれば二度と忘れ得ないものとなるであろう。

次に第二は、ロータリー情報には、固定的な部分と流動的な部分があるという

点である。ロータリーの歴史的事実や過去の規模に関する各種のデータなどは性質上固定的であるし、管理運営の骨格やロータリーの目的、性格と考え方などにかかる情報は、よほどのことがない限り根本的変更が考えられない固定的な部分であろう。これに比して、ロータリーとその活動の今後の発展や展開にかかる情報は性質上流動的であるし、管理運営の一定部分とか新規のプログラムやプロジェクトなどにかかる情報は、極めて流動的な部分であろう。会員の入会にあたっての情報の提供は網羅的で徹底したものであることが要請され、その成否が当該会員の入会後の活動やあり方に多大の影響を与えることは実証済みであるけれども、入会后相当年数を経たいわゆるベテランの会員に対しても、固定的な情報を確認的に提供することはもちろん、流動的な情報を追加して提供して行くことが不可避であるということに配慮がされるべきであろう。

さらに第三は、特に我が国のロータリーにあつては、「サービスの理念」の理解への念入りな情報の提供が必要であるという点である。ロータリーが成立したアメリカの社会は、人々自らがその構成員であるという当事者意識やオーナー意

識の比較的明確な社会であり、そこでは、社会から期待する權益の意識も、社会に対して負担するその維持発展のための責務すなわちサービスの意識も、比較的明瞭であるのではなからうか。そこでは、職業その他の社会的活動の良質な成果を社会に提供して行くというサービスの意識は人々によってごく自然に受け入れられ、その前提に立ったいわば日常的感覺の延長線上でロータリーの諸活動が予定されているのである。ところが、我が国などのように、社会は人々を容れる単なる域体以上の意味を持たず、人々の貢献や収奪とは無関係に独自に存在を続ける実体で、人々は主として社会との対応を意識しつつその中で生きて行くといった社会にあつては、「サービスの理念」の前提自体が稀薄であり、ひいてはロータリー活動の其の定着に色々な問題を生じ易いため、「サービスの理念」の社会的背景となつてゐる社会意識や社会的価値観のあり方への省察などを含む念入りの情報提供が必要であらう。

最後に第四は、ロータリー情報の中には、ロータリー情報の提供やその周知徹底をはかるための手法に関する情報も含まれている。そして、ロータリー情報の

提供といえば、ややもすればこのような手法上の情報が優先され、私どもはその理解のために疲れ切ってしまう弊があるように思われる。そこで、私どもの努力の大半が、このようないわば本末顛倒の結果に終わることなく、ロータリーとは何かという本来の情報自体への理解に直接向けられ、そこに十分な成果があげられることが期待されなければならないと思うのである。

(一九九二年七月)

規定と情報の価値

私どもには、人間が社会生活をして行くうえでどうしても守らざるをえない規則があるだけでなく私どもが社会を離れては生きて行けない関係で、私どもが個人として生きて行くうえでも避けて通れない法則が存在しているようである。

中国の著名な思想家孔子は、論語為政編の中で「心の欲するところに従いて、矩を踰えず」と説かれた。まことに立派な理想的な境地であろうと思う。

綱領を含む国際ロータリー定款、国際ロータリー細則、標準ロータリー・クラブ定款、推奨ロータリー・クラブ細則、国際ロータリーのロータリー財団細則などの規定や、いわゆるロータリー情報と称する一群の情報媒体は、前者は組織体としてのハードであり、後者はロータリアン個々のソフトとしての性格が強いは思われるが、いずれにせよ、いわばロータリーの「矩」といえよう。

ロータリーに矩が存在せず、或いは個々のロータリアンに矩への自覚が欠落したり稀薄になったりすると、ロータリーはロータリーでなくなってしまう。反面、ロータリアンより矩が幅をきかせたり先行したりして、矩のためにロータリアンがあるような事態になっても、ロータリーはロータリーでなくなってしまう。ロータリアンにとつて、心の欲するところに従つて矩を躓えない境地に達することは大変に難しいことだが、何とか努力をしてみなくてはならないと思ふのである。

(一九九二年七月)

会員増強と拡大

いうまでもなく、会員増強 (Extension-Internal) とは、適格な会員を増加させ、クラブの活力を強化することである。私どもは、私どもの活動の成果を社会に提供して行く責務を負っていることの自覚の上に立って、その責務を実現するためにロータリー・クラブに入会し、ロータリアンとして活動を続けているものである。ロータリーの原点が各会員と各クラブ自体にあるとされる所以であろう。適格な会員が一人でも多く私どものクラブに入会しクラブの活動に参加してくれば、クラブのロータリー活動はそれだけ多様な充実した力強いものとなり、ロータリー活動の存在意義が社会的に高まることとなるわけである。「入会を勧誘されなかったのは、ポール・ハリスその人一人だけであった」という寓話に示されているように、新しい会員を推薦することは、ロータリアンとしての最大の特

典であると同時に、基本的な責務であるといわねばならない。従って、会員増強委員会の活発な活動が期待されることはもちろんのことだが、会員の一人一人も、委員会任せにせず、絶えず適格な会員の発見と増強に心掛けなければならない。

なお、会員の増強は、本来的には会員の数の増加だけの問題ではない。ロータリーの考え方と遂に無縁な会員がいくら増加しても、ロータリー活動の強化には何の貢献もありえないからである。従って、新しい会員の入会に先立ち、相応の選考手続が履践されなければならない。また、新しい会員の入会が実現したときは、これに引き続き直ちにロータリーの真の理解を進めて貰うための作業が開始されなければならない。極言すれば、会員数は増加しなくても、既存会員のロータリーへの理解が深まれば、それだけで、その分だけ、クラブの活力が増強されたといえるのかも知れないのである。

拡大 (Extension-External) は、新クラブの創立という手法によって、クラブ活動の拠点自体の拡大強化をはかることである。ロータリアンは、その属するクラブの地域の状況を絶えず観察し、調査し、新クラブ創立の意欲に溢れた適格

な人が少なくとも二五人以上存在すると認められた場合には、地区と相談のうえ、拡大のための計画に着手しなければならない。

△会員増強と拡大とは、その手法の各特性を発揮しながら相互に相補い効果を相乗しつつ、共に **Extension** と表現されるとおり、ロータリー活動の強化と発展という共通の目的に資するものである。ロータリアンの個人的な基本的責務としての自覚に立って、会員のせつかくの努力が要請される所以である。

(一九九一年七月)

質か量か

いうまでもなく、質か量かとは、クラブ会員の増強や新しいクラブの拡大を行う場合に、会員候補者の質を第一義的に考えるか、或いは会員候補者の量を第一義的に考えるか、いずれの考え方が正しいかという論題で、ロータリーにとって永遠の課題であるかも知れない。

量とは、会員候補者の数のことであるから、その意味は明確である。ところが、質とは何を意味するかは、必ずしも明確ではない。ロータリーに関する各種の規定の上では、国際ロータリー定款第四条第三節及び国際ロータリー細則第三条に定められた資格条件のほか、ロータリー・クラブ定款第六条に定められた職業分類上の資格要件を各充足すること、同定款第七条及びクラブ細則（推奨クラブ細則によっているとす） 第九条に定められた出席の義務や、同定款第九条及び同

細則第五条に定められた入会金及び会費の支払の経済的な義務を各履行する意思を有しかつ履行することが可能であること、さらには、クラブの会員選考委員会がクラブ細則第一条第一節(2)及び同条第二節によって会員選考にあたり調査すべきものとされる会員候補者の人格、職業上及び社会的地位並びに一般的適格性の見地からの資格要件を充足することが、厳格な意味における会員候補者の質を示すものと一応考えられるであろう。しかしながら、その中でも、例えば国際ロータリーの定款第四条第三節の「善良な成人であつて、職業上良い世評を受けている者」とか、「一般に認められた有益な事業又は専門職務」とか、或いは、クラブ細則第一条第一節(2)及び同条第二節により会員選考委員会が会員選挙にあたり会員候補者の「人格、職業上及び社会的地位並びに一般的適格性の見地から調査すべき」資格要件などの表現は、決して明確であるとはいえない。なお、クラブ定款第一二三条により、入会の際の受諾によって会員に課されることとなる「綱領の中に示されたロータリーの原則とクラブの定款・細則に定められた拘束の遵守」が期待できるかどうか、会員選挙の段階における会員候補者の質を示

すものとも考えられる。ただ、この点は、本来は、クラブ細則第一条第一節(4)及び同条第二節により、ロータリー情報委員会の委員が推薦された会員候補者にはじめて面接し、ロータリーの目的及び会員の特典と義務について説明を行い、当該候補者が入会申込書の記入提出と入会金の納付を行うことによつて、その受諾の有無が明らかとなる事項であるし、内容が多岐に及びまた些か難解であつて、調査の段階で会員候補者の資質を将来に亘つて判定する基準としては、必ずしも適切でないかも知れない。

そこで、私は、ロータリーの諸規定に定められた会員候補者としての客観的な資格は別として、それ以外の主観的な評価や判定を必要とする点については、社会の当事者の一員としての責務を自覚し、その自覚の上に立つて「サービスの理念」を理解し、そのような自覚と理解に立脚して、職業を通じまた一般の社会的活動を通じて具体的なサービス活動を実行しようとする意思と能力を有していることをもつて、会員候補者の質とすべきものと考えるのである。そして、このような資質を持つている会員候補者は、入会時には十分に開花していなくても、必

ずや将来は立派なロータリーアンに成長する可能性を秘めているものと考えられる。52
私どもの周囲には、残念ながら、何故かこのような資質と全く無縁の人々も稀にはいるし、このような人々がロータリー・クラブに入会しても、ロータリー活動とは遂に無縁であり、場合によっては、却って周囲に害を及ぼす場合も考えられるのである。ただ、このような人々はむしろ少数であり、多くの人々はロータリーの「サービスの理念」を理解し実行する資質を持つていると思われる。何故ならば、ロータリーの「サービスの理念」は、人間社会普遍の真理であつて、ロータリーの独占物ではないからである。私どもは、このような理念と真理に遂に無縁である人々だけをごく限定的に除外し、それ以外の人々はできるだけ多くロータリーに入会して頂き、ロータリー情報などの徹底をはかりつつ、ロータリーの活動を少しでも多くの拡がり効果のあるものとするように努めるべきものと考えるのである。

(一九九二年四月)

卓話のプログラム

ロータリーのプログラムの用語は、広狭さまざまの意味に使われているが、例会卓話のプログラムの意に限って、若干の意見を述べてみたい。

例会卓話のプログラムについては、会員卓話(内部卓話)が原則であるといわれる。会員全員が、本人自身、順番に、自分の職業に関して、卓話を行うという方法であろう。ロータリー・クラブは、その地域社会を職業の面から客観的に表現する職業分類の原則に基づき、会員選考の基準に則り、それぞれの職業を代表するとされた会員の入会によって、バランスよく客観的な存在として組織されているのであるから、その会員が順次自己の職業について語って行き、それを他の会員の全員が相互に聞き合えば、その卓話の成果の総体は、そのクラブのサービス活動の精神的活力源として申し分のないものであるだけでなく、このような卓

話の実施自体が、職業倫理の高揚や親睦の充実のためにも極めて効果的であるとの考え方によるものであろう。

ただ、現今のように、社会の組織や活動が日に日に多様化し、その状況も刻々と変化して行く激しい変化の時代にあつては、ロータリーが正確で豊かな社会の情報正しく入手し、これをロータリー・クラブのサービス活動の適確な活力源として活用して行くことが、ロータリーの活動の活性化と社会的適応のために不可欠であるとの見解を尊重するならば、例会時間の半分を占める貴重な時間帯を、いわばそのクラブの「社会の窓」として位置付け、外部のすぐれた卓話者に依頼して、必要にして有用な情報を卓話の形でクラブ内に計画的に豊富に取り入れる機会として活用するという考え方も、傾聴に値する。その場合においても、関係委員長による月間卓話や新会員のイニシエーションは、例外的に会員本人が実施すべきものであることはいうまでもないが、このような外部卓話(ゲスト卓話)の考え方を採ると、クラブのプログラム委員会の見識と活動には、非常な期待が寄せられることとなるであろう。

(一九九一年七月)

ロータリーの雑誌

国際ロータリー細則とクラブ定款の規定によつて、ロータリーの機関雑誌が「The Rotarian」誌であること、RIが指定記事を掲載することを義務付けて公認した数多くの公式の地域雑誌が世界中に発行されていること、ロータリアンは機関雑誌か公式の地域雑誌を講読すべきものとされていること、「ロータリーの友」は我が国におけるこのような公式の地域雑誌であり、一九九〇—九一年度に最も優れた公式の地域雑誌としてRI会長の表彰を受けたこと、「友」は全国のカバナーで組織されるガバナー会が委嘱したロータリーの友委員会の管理と監督下にあるロータリーの友事務所で編集され発行されており、各地区から一名あて選任された地区委員が地区との連絡、編集への参画、雑誌講読の普及の促進等に携わっていることなどは、周知のとおりである。

「友」には、ロータリーに関する基本的及び流動的な情報の解説、R I、各地区、各ロータリー・クラブの国際レベル、国内レベル、地区レベルでのプロジェクトや活動の実績の紹介、すぐれた講演の記録、ロータリアンの個人的意見や趣味の発表など、広い意味における情報の宝庫というべき素晴らしい内容を備えているのに、精読者は三分の一以下、全く読まない会員も三分の一を数えるといった実情で、購入して積んでおくだけの「読まれざるベストセラーズ」と揶揄されかねない状況にあることは、まことに残念というほかはない。その原因として、左開きのR I指定記事を中心とする情報記事がややもすれば直訳文体で我が国の言語感覚にすぐわないため読みづらいつか、内容的に面白くないとか、読む時間がないとか、色々な理由があげられている。感覚的に読みにくいという点は確かに一理があると思われるので、ポイントを明確にした簡易かつ大胆な意識文体を考えてみるなどの工夫も、今後は是非必要であろう。しかし、その他の理由は、果たして如何なものであろうか。

私は、ロータリアンが「友」を読まないという問題は、多くの日本人が一般的

に本格的な本に親しまないという根本的命題の単なる一症例に過ぎないと考える。元来、適応意識の社会にあつては、人々は物を考えることが不得手であり、その当然の結果として、媒体手段に親しむことに熱意がないだけでなく、むしろ苦手である。このように、地史的な或いは社会的な諸原因によつて思想的省察の未成熟な我が国民は、却つてその反射的效果としての未曾有の経済的繁栄の渦中に投ぜられた。そして、これに適應するために極端な知的偏向競争教育とこれに続く過度の競争体質社会に終始生きること之余儀なくされ、日常生活において精神的な余裕を失い疲れ切っている。その結果、社会的価値観の混迷が瀰漫し、我が国民の多くはごく目先の当面役に立つ事柄以外は個性的興味や本質的関心を喪失し、ひいては人間や社会を学ぶための読書その他の自己研修の努力を放棄してしまうことになり、これらの悪循環は深刻化して殆ど改善の兆しはない。今日、日本の社会的混乱は、正にこのような我が国民の精神的荒廢の延長線上の事態であり、広い意味での教育への視点を明らかにしつつ、国民の一人一人の自助努力により、時間をかけて根本的な改善をはかつて行く以外に、解決の途はないと思われる。

ロータリーは、人間を考え、社会を考え、そしてサービスを行動するロータリーアンの集団である。根底にロータリーの思想という理念が存在することがその活動の絶対の前提であり、それがロータリーの精神的資質というべきものと考ええる。私どもは、怠惰な悪循環に陥ってはならない。私どもは、まず理屈を抜きにして、「友」の一冊を読まなければならない。次いで、一冊、三冊と読み進む。あとは、自然に手が「友」に届く。面白くないとか時間がないということとは、恐らく真面目な理由とはならない。会員の絶大な努力が期待される所以である。

なお、会員の「友」への投稿が多くを数えるようになることはまことに喜ばしいことであるし、また、「友」がクラブ・フォーラムなどの材料として使用されることなどは、極めて有用な活用手法であることを付言したい。

(一九九一年七月)

ロータリーの広報

ロータリーにおける広報 (Public Relations) とは、ロータリアン、ロータリー・クラブ、地区及びR Iのそれぞれが、それぞれの立場において、ロータリーの人類への奉仕を拡大する目的で、その綱領やプログラムや活動を通じ、ロータリーの意図や実績を、ロータリアンはもちろん、その家族、友人、知人、一般地域社会の人々、世界の人々に紹介し、広く知らせ、説明し、理解を深めさせるために行う活動をいい、機関雑誌「ザ・ロータリアン」や、「ロータリーの友」などの公式の地域雑誌の頒布はもちろん、政府その他の公的機関や地域社会の指導者及び有力な報道機関の理解と協力をえてこれを活用する手法や、成功裡に完結した具体的な奉仕プロジェクトを事例の素材として使用する手法などは、極めて効果的であるとされている。

従来ややもすれば、我が国におけるロータリーの広報活動は甚だしく低調であつて、ロータリーやその活動は殆どマスコミに紹介されることもなく、また、地域社会の人々に周知されてもない憾みがあつた。その原因の大半は、ロータリーの側からの広報活動が消極的であつたことに起因する。そして、その原因としては、陰徳すなわちよいことは人目に立たないようにそつとする方がよいといつた日本の気風と倫理がその誘因であることは否定できないが、これは適応意識の社会に特有のものであり、当事者意識に立つロータリーにあつては、すべての行動はその趣旨や目的を明確に行うわけであるから、私どもロータリアンは、その立場から広報を考えるべきであらう。広報を営利的な広告宣伝の類とする誤解と、これに伴いロータリーには広報は有害であるとする誤解なども、その誘因と考えられるが、広報に対する正しい理解が必要であらう。いずれにせよ、ロータリーの広報が低調であるために、一般社会や報道機関の関係者のロータリーに対する理解は極めて不徹底なものとなり、それらの人々にとってロータリーとは有産階級の昼食会か暇にあかせた余技程度のものでさしたる社会的意義もないと

する予断と偏見が広く先行し、これらの誤解がさらにロータリーに対する正しい認識を阻害するという悪循環に陥っている嫌いがあつた。

しかしながら、ロータリーの思想は、ロータリアンだけが一人占めにすべきものではない。ロータリーの思想は、人間社会共通の真理であり、人類すべての共有財産である。従つて、家族から知人へ、そして一般社会の人々へと、広く解放すべきものである。そうすれば、ロータリーの思想を理解して新たに入会しようとするすぐれた会員候補者も増加するであろうし、入会しないまでもロータリーの思想と活動に共鳴して側面から或いは独自の立場で協力的な社会的行動をとる人々も増加し、ロータリーの思想は、それだけ広くかつ深く人類のために寄与できることとなるであろう。

さらに、ロータリーのサービスの特質は、サービスをするロータリアンとサービスを受けて頂く社会の人々との間にまず心の架橋を行い、物心の受け渡しを行う場合はこの橋上で行う点にあるかと思われる。そして、この心の架橋は、サービスをする側のロータリアンとサービスを受けて頂く側の社会の人々の双方に

ロータリーに対する正しい理解が存在して初めて実現することとなろう。ロータリーのサービスの責務は、サービスの相手方にロータリーへの理解の上に立つて所期の形でサービスを受け取って頂いてはじめて完結するものといわねばならない。この意味において、広報は、なるべく充実することが望ましいといった態のものではなく、サービスの責務の最終の段階として、ロータリアン、ロータリー・クラブ、地区及びR Iのそれぞれの基本的な責務の重要な一部を構成するものと観念すべきものであらうと思われる。

(一九九一年七月)

Ⅲ 職業とロータリー

職業の倫理

私達は、自分達で社会を形成しこれに参加して、その中で生きている。私達は、社会の一員としてでしか生きて行くことはできないのである。しかも、社会が正しく豊かに運営されているためには、社会が私達の数多くの需要を充たしている必要がある。そこで、社会の人達は、これらの需要を充たすために、それぞれ仕事を分担して、一生懸命に努力を重ねている。私達は、社会の人達のこのような数多くの努力の成果を享け、はじめて人間としての生活を営むことができるのである。

私達は、このような見地から、自分が社会において分担している仕事、これを私達は「職業」といい、その意義を強調するために天（社会）から自分に与えられた仕事——天職（Vocation）という表現をあてるのであろうが、このような仕

事が、単に生活の糧のためとか金や名誉のためとかでなく、もつと基本的に、社会に対する私達の責務としての性格を持つものであることを十分に認識しなければならぬ。そしてさらに進んで、社会的存在としての私達が個人としての真の幸福を享受できるかどうかは、私達がこのような社会的責務としての職業を自覚的に実践して、自分に課せられた社会性を高度に充足できているかどうかにかかっていることを深く認識しなければならない。

私達は、これらの認識のもとにも次の倫理に立脚して、事業であると専門職務であるのを問わず、自己の職業の実践に努めるものとする。

一、自分の職業が社会に必要であり有用であることを認識して、これに自信と誇りを持つこと。

二、他人の職業もまた社会に必要であり有用であることを認識して、これを高く評価し尊重すること。

三、職業が社会分業により与えられた責務であることを自覚し、少しでも良質の仕事为社会に提供することにより、職業の道德的水準を高めかつ職業を品位あ

らしめるよう、最善の努力を尽くすこと。

四、職業上の諸活動を実践するにあたっては、自分の行為が真実であるかどうか、公正であるかどうか、関係者との間の好意と友情を深めるかどうか、関係者のためになるかどうか、とのいわゆる「四つのテスト」を常に反動するとともに、「すべて人からせられんと思うことをその人にせよ」という黄金律の思想を精神的基盤とすること。

五、日分の繁栄は他人の繁栄とともにのみあることを自覚して、不正不道な職業上の手法を慎み、不当な独占の排除と公正な競争の維持に努めること。

六、職業上の所得を適正な対価又は正当な報酬の範囲に限定し、これを超える不正不道な利得を期待したり、要求したり、受領したりしないよう自制すること。

七、職業上の活動の結果について、計算を超えた厳しい責任を自覚し負担すること。

八、他に職業上の不正不道な手法を用いようとする者があつたり、又は不正不道な職業上の利得を得ようとする者があるときは、業界の公正な倫理基準の設定

やその実現に努めるなど、適切な配慮と必要な努力を怠らないこと。

九、職業上の利益を得るための直接の手段として、ロータリーの親睦を利用しないこと。

一〇、仕入先、顧客その他の取引の関係者や、出資者、協力者、従業員その他の職業の関係者との人間関係に深く配慮し、相互に感謝と信頼の心が通じ合うよう努めること。

一一、国内問題たると国際問題たるとを問わず、常に職業に関する情報と事例の調査研究を行うはもちろん、職業の現状の正しい認識とその手法の公正なあり方への省察を尽くすことを通じて、将来的展望を踏まえた職業の正しい社会的対応に資するよう努めること。

— 一九八七年一〇月 —

周知のように、一九一五年サンフランシスコの国際大会で採択された倫理訓(道徳律) **Code of Ethics** は、幾多の紆余曲折の末、一九七八 — 七九年の R I 理事会の決議により配付と頒布が中止され、一九八〇年の規定審議会の決議によ

つて国際ロータリー細則から削除され、その取り扱いが各地区又は各ロータリー・クラブの自由な方針に委ねられることとなっていた。たまたま、私が大阪北ロータリー・クラブの一九八七—八八年度の会長を仰せつかっていた当時に、倫理訓（道徳律）の内容や表現には、時代の変化への適応に問題はあるが、その本来意図する精神的な内容には多大の貴重なものが含まれていると受け止めたので、これらを基調としつつ、これに我が国の社会意識の特性などを加味して、ロータリーのサービスの理念の原質である職業の倫理観を見直し再構成して、右の「職業の倫理」を起案し、クラブの職業奉仕委員会と理事会のご検討を頂き、一九八七年一〇月にクラブレベルで制定して頂いた。その後間もなく英訳のうえ、当時のR I直前会長ケラー氏にもご送付申し上げた。現在では、すでに一九八九年の規定審議会で八カ条からなるR I現行の職業宣言が採択されて今日に至っているが、我が国における一ロータリー・クラブの考え方として、ご参考にして頂ければ幸甚である。

（一九九一年四月）

職業奉仕についての若干の考察

人は社会の中でしか生きて行くことはできない存在であるという認識、換言するならば、人は社会的動物であるという認識は、殆ど疑いを容れる余地のない真理といえよう。そして、このような認識の上に立って、私ども一人一人が当事者として主体者として社会を形成し、その社会の中で各自が生きて行くという当事者意識を中核とする社会意識が成立する。このような社会では、私どもが社会から何を期待するか、また、社会に対して何をすべきかとの意識が比較的明確である。何故ならば、私どもが社会を形成するのは、私どもが生きて行くための有形無形の条件を充足するための必然的な欲求自体に基づくものであるし、また、私ども以外に私どもの社会を維持し管理し発展させる者は一切存在しないことも明らかであるからである。

ところで、社会とその当事者である私ども一人一人を結ぶ諸々の構成要素は数多く存在し、社会の進歩に伴って質量共に複雑化するのには当然であるが、その中核となっているのが「職業」であろう。私ども各自が分担して社会に提供する職業上の成果を相互に享受しあうことが、社会を形成してその中で生きる最大の目的でもあり効用でもある。ここに、社会から自己に付託された自己の職業（Vocation）について最良質の成果を社会に提供することを中核として、職業奉仕活動（Vocational Service）を行うという社会的責務が私どもに成立する。そして、「綱領」の理念と、これを敷衍する「四つのテスト」、一九八七—八八年度のRI理事会の「職業奉仕に関する声明」、それに以前廃止された道德律の延長線上において一九八九年の規定審議会が採択した「職業宣言」などの意義への理解が導かれる。この「職業宣言」においては、職業が社会的責務であることの本根認識自体を基盤とし、職業の倫理的規範として、法律及び道德の遵守、職業の品位の保持、職業関係者との公正関係の維持、自他職業の有用性等の認識、地域社会生活の質の向上への職業的努力、広告やロータリオン間の取引にかかる倫

理などが、その必然的内容として提示されていることは、周知のとおりである。

これらの職業奉仕活動の原点が、綱領第二の後段に「ロータリアン各自」に求められる事柄として定められているとおり、ロータリアン各自が個人として自己の職業を通じて社会に奉仕することにあることは、いうまでもない。いわゆるアイ・サーブとしての職業奉仕活動である。ここで、個人としての職業奉仕活動といっても、それは狭い意味における本来の職業行為自体だけを意味するものではなく、人的物的設備などの調達整備などを始めとして、職業行為を処理するために直接必要な事柄の処理を当然に含むであろうし、さらに職業行為の処理に密接に関連する事柄もこれに含まれると考えるべきであろう。この意味において、会員企業の自社の営業活動にかかる違法駐車解消のための努力などは、喫緊かつ実現可能な身近な職業奉仕活動の事例として、高く評価されるべきであろう。

ところが、元来綱領第二の前段は、必ずしも「ロータリアン各自」に求められるという限定はなく、ロータリアン個人としてのアイ・サーブの活動とクラブなどの集団としてのウイ・サーブの活動の双方の基準として予定されていることは、

その表現自体からも明らかである。従来からも、例えば、会員各自の職業奉仕への意識の高揚や、奉仕活動の実行への激励、さらには事例や手法の紹介を会員個人に対して行う活動などが、クラブ自体の責務としてのウイ・サーブの職業奉仕活動とされていたが、一九八七—八八年度のR I理事会は「職業奉仕に関する声」の中で、職業奉仕活動を個人とクラブ双方の責務と理解すべきことを強調し、R Iの職業奉仕委員会は、ウイ・サーブの活動の基準として新たに「職業奉仕における新方針」を定め、就職相談、職業指導、職業情報、職業活動表彰などの事柄について、個別に職業奉仕部門の小委員会を設けて、クラブとしての職業奉仕活動として推進すべきこととしたことは、周知のとおりである。ここにおいて、職業とは、会員各自の具体的な個人の職業行為や当該クラブの会員が携わる職業行為の総体とこれらに関連する事柄の限界を超え、地域社会の諸構成要素の一つとしての一般的な職業の観念自体を意味することとなっている。このような意味における職業については、むしろ社会奉仕活動の対象とすべきであるとの意見も十分ありえよう。しかしながら、前述のように綱領第二の前段において、職業は

必ずしもロータリーアン各自の個人的職業に限定されているわけではなく、一般的職業自体も道徳的水準の向上や存在意義の尊重その他の奉仕の対象とされているのであるから、新方針の指摘する事柄をクラブの責務としてのウイ・サーブの職業奉仕活動として取り上げることが、十分に意義のあることといわねばならない。職業奉仕活動も社会奉仕活動も、前者が職業を通じ、後者が一般の社会活動によるとの手法上の相違があるだけで、窮極の目的が社会奉仕の実質に帰すると解される以上、なおさらその方針は支持されるべきであろう。

なお、綱領第二の後段においては、奉仕の対象は社会であり、職業は奉仕の手段とされているが、前段においては、一般的な職業の観念自体が奉仕の対象とされており、この基本的な職業の占める位置の相違点を十分に理解しておかなければ、「クラブには職業がないのに、クラブの職業奉仕とはおかしい」といった議論が出て来ることになるのであろう。

ちなみに付言するならば、社会を自己を容れる単なる域体と観念し、主としてそれとの適応をはかりながら生きて行くといいわば適応意識が支配する社会は、

叙上の社会とは質的に相当に異なるといわねばならない。そのような社会では、社会はそこに住む人々と殆ど無関係に存在を続け、職業は単なる生計を得るための手段とか、団体内における本能的な力関係の象徴以上の意味を持つことはない。そして、住む人々の社会的責務 (Service) とか、天職 (Vocation) としての職業の觀念の存在自体が疑わしいのはもちろん、職業奉仕 (Vocational Service) への理解は甚だ困難なものとなるであろう。もちろん、これらの両社会のいずれが優れているかを決めることは甚だ困難であり、また、これらの両社会以外にこのいずれにも属さないさらに別異の社会が存在することも否定できない。いずれにせよ、我が国のようないわば後者の色彩の淡い社会へのロータリーの導入の眞の意義は、ロータリー的前提となつて前者の社会意識を含め、多様な社会意識のあり方への再検討の契機を私どもに与える点にあると考えるのである。

(一九九一年七月)

職業奉仕の新しい側面に関する一つの提言

国内問題たると国際問題たるとを問わず、経済活動の近時における著しい伸展に伴い発生した新しい諸問題が、ロータリーの職業奉仕の理念とどのような関連を持つかについて、法的側面から若干の考察を加えてみたいと思う。

私どもが社会生活を行うにあたって与えられる権利すなわち私権が、国内法の領域において社会公共の福祉との関係から一定の性格的制約の下に置かれることは、現代における社会思想の基本的認識の一つとして、かねて周知のとおりである。日本国の最高規範であり国民相互の基本的合意とされる日本国憲法は、その第二九条において、「財産権は、これを侵してはならない」として財産権の基本的保障を定めつつも、続いて、「財産権の内容は、公共の福祉に適合するやうに、法律でこれを定める」と規定して、いわば社会権としてのその性格付けを行い、

これを受けて、例えば私法の基本法である民法も、その第一条の冒頭で、「私権ハ公共ノ福祉ニ遵フ」として公共の福祉による制約を掲げたうえ、さらにこれを前提として、「権利ノ行使及ヒ義務ノ履行ハ信義ニ従ヒ誠実ニ之ヲ為スコトヲ要ス」という信義誠実の原則と、「権利ノ濫用ハ之ヲ許サス」という権利濫用禁止の法則を謳っている。さらに、このような基本思想の延長線上において、本来自由を保障されている企業活動についても、強い公共の福祉上の要請から、右のような一般的制約のうえに、さらに種々の制約が課されている。各業種に特有の個別的な行政規制や消費者保護基本法を頂点とする各論的な消費者保護の立法などのほか、私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（独禁法）、不正競争防止法、不当景品類及び不当表示防止法（景表法）、大規模小売店舗における小売業の事業活動の調整に関する法律（大店法）など、一連のいわゆる経済法と称される領域において定められた制約である。

その目的とするところを要約するならば、直接及び間接の手法により、経済の健全なあり方の保持に努め、事業活動にかかる消費者ないし享受者としての国民

の利益の確保向上をはかることであろう。この目的のために、まず直接的手法としては、生産及び流通並びにサービス等の事業活動とその成果の質を、行政規制自体によって直接良好に確保しようと努めているが、さらに間接的手法としては、まず、不当な取引制限及び不公正な取引方法並びに不正な競争行為などを禁止して、事業活動における公正自由な競争を確保することによってその目的を達しようとする手法と、次に、このような本来公正かつ正当な活動の結果生ずる事業活動の過度の独占状態や大規模業態に拡大した事業活動を一定の場において一定の範囲で逆に抑制し或いは禁止して、均衡を確保するための調整措置を講ずることによってその目的を達しようとする手法とが、併せ用いられている。そして、このような一見矛盾した相反する措置を、同時に調和的に講じて行く必要が避けられないところに、経済活動の複雑さや困難さを汲み取ることができるのである。

ところで、法領域における経済の健全なあり方とか事業活動の受益の確保とその質の向上というこのような問題を、ロータリーの理念の世界に引き直すならば、職業活動のあり方とかその成果の質の確保とその向上という課題になるであろう。

従つて、このような法的制約に盛られている基本的な考え方自体は、限りなく変化し発展してやまない経済活動に対応するロータリーの視点の原質として、ロータリーが提唱する職業奉仕、換言すれば職業倫理の理念の中に、逐次取り入れられて行かなければならない。特に、近時の貿易摩擦などに象徴されるように、経済的諸活動が企業の合理化とたゆまない努力により一国の限界を超えて世界的規模に拡大し、多様かつ多量に大規模な組織を以て遂行され、多大の積極消極両様の重大な経済的影響を結束するような今日の事態に対処するためには、右のような問題に対する明確な認識と徹底した検討が不可避であろう。

一言にして結論を要約するならば、世界経済の社会においても、いわゆる公共の福祉に極めて類似した理念が存在しなければならぬということであろうと考へるのである。例えば、国家という政治形態が現在の世界において不可避の存在である以上は、一国単位の関係国の経済体制自体の健全な保持や、関係国民一般の福祉の長期的かつ客観的な安定した維持発展なども、まずその理念の基本的なものに該当することになるであろう。国内的には私権や企業活動に対する公共の

福祉による制約がありえても、国際社会における経済活動の自由にはそのような制約はありえないと解するような考えは、どのような見地からしてもとりえないからである。換言するならば、私権が公共の福祉の制約下にあるのは、人間が本来的に社会的存在であるというその本質に由来するからであり、この命題は、国内社会であろうと国際社会であろうと、何ら異なるところなく適用されるべきものであるからである。

以上のような次第で、一国の国内社会であろうと或いは国際社会であろうと、経済活動には均しく一定の経済法的制約が存在し、基本的に公正かつ自由な経済活動を維持し保障するための努力が要請されるとともに、反面、営業や貿易などの経済活動を多角的に一定の限度内に抑制する努力も要請されると考えるべきであつて、ロータリーはこれらの制約の正しいあり方をふまえて提唱し、その実現に努めて行くべきである。ロータリーの綱領が中核とする理念、職業の道徳的水準を高め職業を通じて社会に奉仕するため職業を品位あらしめようとする理念、職業人としてのロータリアンの世界的親交によつて国際間の理解と親善と平和を

推進しようとする理想も、現時においては、このような考え方の認識と把握とその思想的基盤の主要な一つに加えることによって、はじめてその実現が保証されるものであると考えるのである。

(一九八九年二月)



IV 国内的な社会とロータリー

社会奉仕に求められる現今の視点

現代は、二、三世紀に及ぶ社会の变革を僅か五年か一〇年で達成してしまう歴史にかつてない激動期であるといわれている。まず、社会主義的手法の消滅に伴い、私どもの生活の基盤である社会や経済の体制が、修正的な形態を含む資本主義と社会主義の二極対立の構造から、資本主義の多様な修正形態相互間の多極対立の構造へと移行した。科学技術の開発は、感覚的に快適生活を追求する私どもの本能と直結して、地球が危ないときさやかれる程度にまで底知れない進行を続けている。私どもの心は、物心がついてから成人に達するまでのかけがえのない精神形成期を通じての徹底した知能偏重の画一的競争教育の強制と、その後における過度の競争体質環境における一貫した職業生活への埋没により、自己の喪失や価値観の混迷を結果して、著しい変質を被りつつある。そして、これらの社会

生活の著しい変革は、私どもが先進的成果として従来から無反省に受容し模倣し依拠してきた人間の欧米的資質、なかならず科学的資質と人間社会の集団管理技術やこれらによつて与えられた在来の価値観に対して、根本的な再検討を私どもに迫つて来ている。

先頃 RI が提示した社会奉仕活動の主要な四つの分野、すなわち、人間尊重（高齢者、障害者、青少年、薬物濫用、犯罪や非行、機能的文盲など）、地域発展（地域の開発、文化の保存育成など）、環境保全（地域環境、地球環境の保全など）、協同奉仕（村落共同体、ロータリーアクト、インターアクトその他ロータリーが地域の人々と共に行う奉仕活動など）も、右のような見地から、新たな見直しが必要となるかも知れない。例えば、人間尊重の分野では、新たに人間の心の問題を本格的に取り上げる必要があるかも知れない。高齢者問題も、自己の喪失を始めとする職業生活の歪みや、環境的な諸原因による生理的な障害や、最終的には障害者問題に帰一する性質論などを取り上げるべきであるかも知れない。障害者問題では、多数健全者による少数障害者の保護救済の視点から、健全者と

障害者の共生の視点への転換が検討の対象となろう。地域発展や環境保全の分野では、人間のための地球利用の視点から人間と地球自然の共存の視点への転換であり、資源利用や生産活動と消費との関連やその価値の再評価であり、また、化石燃料や原子核の処理自体からこれらによるエネルギーの無制約な開発と利用を前提とした工業化社会への再検討などである。協同奉仕の分野では、新たな社会問題への効果的な対応としての村落(地域) 共同体の活用であり、また、一定範囲の高齢者によるシルバーアクトなどのクラブの結成と運営の支援の提唱なども考えられるであろう。さらに、いずれの分野にも通ずる問題として、広い意味における教育のあり方への検討や提言と協力、爆発的な人口増加とその影響や抑制、麻薬その他の薬物問題の持つ健康と社会秩序にかかる側面、エイズ問題やバイオテクノロジー関連の問題、組織的暴力問題への各対応などが、地域の単位においても、また、 国際的な拡がりの中でも、検討されねばなるまい。

いずれにせよ、職業奉仕は職業を介する手法により、社会奉仕は一般の社会活動の手法による、との相違はあるにせよ、ロータリーのサービス活動は、窮極的

には、すべて地域社会や国際社会の社会問題の認識とその解決への努力に帰着するわけであるから、私どもは、激しく変動して行く現今のこの社会で日々新たに生起する数多くの社会問題をよく観察して正しく認識し、これを広い意味における社会奉仕活動の対象として取り上げて対応を検討し計画して行く柔軟さと積極性を保有することが求められることとなるであろう。私どもの社会奉仕活動の対象たる社会問題の背景と内容の右のような激しい変動に伴い、私どもがその解決のために採るべき手法も、相応の対応を迫られることになる。まず、問題の認識の面では、ロータリーの外部の正確で豊かな情報の摂取とそれへの理解が不可欠である。そのためには、各分野のすぐれた学識経験者からの指導や教示を受け、各種行政機関や公私の団体との連絡を強化して情報の提供や問題の解説を受け、また、地区、各ロータリー・クラブ、各ロータリアン間の討議を通じて問題の相互の認識を深める必要がある。次に、解決への努力の面では、各ロータリー・クラブ相互間の共同作業、各ロータリー・クラブと地区との間の共同作業はもちろんで、ロータリーと行政機関又は公私の団体や地域社会の人々との共同作業や、

必要な場合はその目的のための新たな団体の結成などの発想も求められるであろう。さらに、ロータリー固有の奉仕部門、すなわち職業奉仕、社会奉仕、青少年への奉仕や、場合によっては、国際奉仕の部門などの縦割りの割付け的な認識と解決への努力だけに縛られるべきでなく、思い切った問題ごとの横並びの総合的な認識と解決への努力がはかられるべきではないかと考えられるし、そのようなところに、日々新たな様相を深めて行く現今の社会問題に対するロータリーの今日的役割と存在意義が確かめられるのではなからうか。

RIが一九九二年度の規定審議会で決議した「社会奉仕に関する新声明」が、基本的に地域社会の生活の質の向上と公共への奉仕がロータリーの社会的責務であるとの前提に立ちながら、まず各クラブに対し、地域社会のニーズを正確に把握してこれに適切に対応する活動を実施し、実施にあたっては、国際レベルの視野の確保と一般社会への周知に努めつつ、ロータリー関係グループとの緊密な協力と、他の団体や地域社会との協力や共同作業をはかり、場合によっては他の団体や地域社会自体にプロジェクトを実施させ又は継続中のプロジェクトを委譲す

ることを考慮することなど、十項目に亘る具体的方針を勧奨し、次いでR I自体は、社会奉仕のニーズと活動にかかる情報を提供し、ロータリーの綱領を推進するより広域的なプログラムやプロジェクトを提案する責務を負うとしていることは、社会奉仕に関する決議二二―三四を存続することとするにあたり具体的方針を付加しようとする趣旨に出るものであるとの点はさて置き、前記のような社会的背景の現状への適応をはかるとの視点から眺めれば、時宜を得たものと評するのではないかと考える。

(一九九二年七月)

心の環境障害

高度経済成長にかかる公害対策問題の延長線上において定着した地域環境問題も、時と共に新しい視点と要素とを付加されてその認識の充実度を一応深めつつ今日に推移し、また、ここ数年来急激に危機的様相を指摘されつつあった地球環境問題も、最近に至り漸く問題の一応の認識の画定を了して対策の策定に手を及ぼしうる域に達しつつある。私どもは、各クラブにおいてはもちろん、地区及びRIのレベルにおいても、ロータリー精神に立脚し、社会に向けて適切な提言と強力な活動を展開すべきであることはいままでもない。

ところで、我が国においては、このようないわゆる物的環境問題もさることながら、これと並行して、否これ以上に、心の環境問題への認識とその解決への努力が、今日ほど要請されている時期はないのではないかと考える。しかも、物的

環境問題と異なり、私どもの主体性自体にかかる問題である点が、その認識と解決を著しく困難としている可能性が極めて高いと思われる。

私どもの日常の精神生活を構成する思念の实体は、現象面においてどのような形態をとろうとも、また積極参加ないしは現状からの逃避のいずれであっても、その原質は高度の競争体質である。元来、競争は、本来的に生物本能としての実体を備えるものであるうえに、人間社会の活性化に必要な良好な志向として、無反省に是認され奨励されて来た。私どもは、生まれ落ちるや否や、好むと好まざるとに拘らず、知能を主体とする激甚な競争教育の渦中に投ぜられ、引き続き強固な管理組織を中核とする企業その他の競争社会の構成員として一生を過ごし、人間の真の資産は時間と健康であることを観念的には理解しながら、たまたまその機を得てもこれを活用する術を知らず、殆ど家庭を顧みることなく一途に職業生活を終えてみれば、真の自己は欠落消失し、徒らに最も困難な高齢者問題の対象となっている。これは、私どもが直面している心の環境上の重大な障害の結果以外の何物でもない。

もつとも、私どもも手を拱いていたわけではない。公正な競争ですら、能力差や個体差を個人差として社会的に認知拡張して定着させてしまうのに、さらにこれにいわゆる不公正な競争が不可避的に参入する。こうして、被害は受忍の域を超えるものとなり、社会はいわゆる人間の顔を失い、却って私どもにとつて有害な域体と化してしまふこととなった。そのため、私どもは、競争に部分的制約を加え、或いは競争自体を否定する等の工夫を講じたが、いずれもその手法が外的なものにとどまっていたために、失敗に帰した。現に、社会主義の手法が最近漸くその歴史的使命を終えようとしていることは、私どもの記憶に新しいところである。もちろん、社会主義の否定は、その他の手法の是認を意味するものではないし、従前の修正主義的な自由主義に果たして人間の顔が存在するかどうかは、高齢者、障害者、非行者などの問題にかかる在来への対応を始め、政治、経済その他昨今社会の各面各層に去来する幾多の異常な事象や事件を逐一思い浮かべつつ、私ども一人一人が胸に手を置いて考えてみなければなるまい。

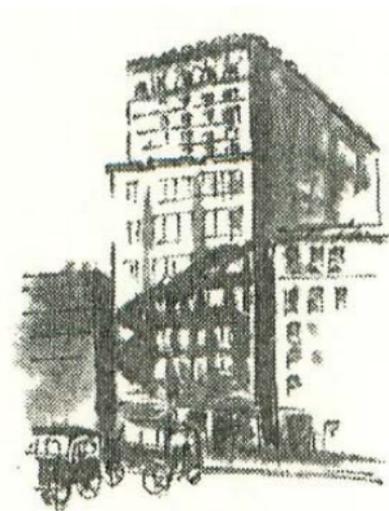
いうまでもなく、競争の否定は誤りである。そして、競争の制約は必要である

うが、それは外的なものであってはならない。競争の制約は、内的手法によらなければならぬ。思想とは人間を考えることをいうとするならば、人間は社会においてのみ生きる社会的動物であるが故に、思想は同時に社会のあり方を考え、適切な社会意識を持つことを意味し、一定の社会的価値観を媒介として、無益な過度の不公平な競争を内的に抑制する。幸いにして、人間の社会性の妥当な実現を意図するロータリーは、すでにその綱領及びサービスの理念並びに「四つのテスト」その他数多くの提言を通じて、正しい社会意識のあり方を、私どもに示唆している。

地史的な或いは体質的な諸々の原因によって当事者としての確たる社会意識が比較的稀薄かつ未成熟ではないかと思われる我が国において、私どもロータリアンは、目前に与えられているロータリーの理念の今日的理解をさらに一段と深めつつ、我が国の心の環境問題の解決のため、本格的な検討と行動を要請されているものと確信するし、また、心の環境問題の改善がはかられるならば、これに伴い、地域環境ないしは地球環境などの物的環境問題も、却って根本的な解決がさ

らに有効に期待できることとなるのではないかと考えるのである。

(一九九一年六月)



社会奉仕をめぐる諸問題への対応

— 地区地域対策合同委員長会議を通じて —

周知のように、現在は、私どもの世界が音を立てて激動して行く時代である。以前であれば二、三世紀を要した社会の変化が、僅々五年か一〇年で達成されてしまう時代ともいわれている。その原因は、まず、社会主義という社会管理の実験的手法が歴史の必然的経過として消滅して行くことに伴う政治、経済の世界的枠組みの根本的な変動である。次には、私どもの本能に直結して快適生活を感じ、的に追求してやむことない科学技術のとどまるところを知らない開発である。さらには、私どもの社会生活の各方面各界を形成する牢固とした過度の競争体質と、これに伴う人々の心の変質である。そして、これらの諸原因が重なり合い幅濇し合い、地域及び地球規模で物的環境の悪化が着々と進行する一方、国際社会から個人生活に至るまで人々の社会意識や価値観とこれらを素地とする社会の秩序や

効用などに対する期待が混迷の度を深め、私どもが当面する各種の社会問題は、量的な増大はいうに及ばず、質的にも日々に新たな多様化の途を辿っているといつても、過言ではない。

さらに、これらの諸問題は、ロータリーの奉仕活動の対象としての見地から眺めた場合、より流動的でボーダーレスなものとなり、職業奉仕とか社会奉仕とか国際奉仕とか青少年奉仕といった従前の部門別の区分の中に収まり切れる状態にはなくなって来ている。身近な例としていわゆる迷惑駐車問題を取り上げてみても、子どもの職業生活との関連をはじめとして、地域社会における問題とか、青少年への課題といった、色々な側面を帯有している。しかも、これに対応して行く手法も、ロータリアンの奉仕活動だけでは賄い切れない面が出て来ている。例えば、地域住民を取り込んだ共同組織を主体として対処したり、他の団体や行政などと手を組んで処理しなければ、到底所期の効果を期待できない問題が増加して来ているのではないかと思われる。そして、ロータリーは、これらの諸問題について、必ずしも在来の部門別の区分に捉われない、より柔軟で多角的な見地か

ら情報を蒐集することを手始めに、考え方の整理と新しい視点の模索や手法の策定にあたってのより効果的な工夫をするなどの今日的対応に着手してその遂行に努めなければ、存在意義自体を問われかねない状況にあるかと思うのである。

以上のような地域対策の見地から、一九九一—九二年度の国際ロータリー第二六六〇地区では、職業奉仕、社会奉仕、青少年奉仕の各関係地区委員と地区内全ロータリー・クラブの関係委員長に参集して頂いて地域対策合同委員長会議を開催し、従来、社会奉仕活動の主要な課題とされて来ている環境、身体障害者(以下本稿で「身障者」という)及び高齢者の諸問題をテーマとして、それぞれ関係の識者の見解を伺い、また、戸田バストガバナーをコーディネーターにお願いして、質疑応答と出席者相互の討論を行い、問題に対する認識をあらため合いまた深め合った。その成果の共通点は、私どもは、環境と共に生き、また、一般社会において身障者や高齢者と共に生きて行かなければならないということであったが、各別の問題ごとの要約は、大略次のとおりである。

一、環境の問題について

環境の問題については、京都精華大学教授植田劬氏の編著にかかる『地球をこわさない生き方の本』の論説を基調としつつ、同氏から「共生への視点から環境を見る」のテーマで見解を伺い、これらに基づいて質疑と討論が行われた。伺った見解の内容は、大略次のようなものであった。

「私どもは、従前からの我が国の貧しさの素地の上に第二次大戦敗戦による極度の物的窮乏を体験したため、物への渴望が癒し難いまでに進行し、本来は戦前日本の加害の延長線上にある筈の朝鮮戦争によって潤った特需を機に、却って経済復興への手がかりを掴み、物質的繁栄への途を歩み始めた。同時に、私どもは、困っている人、辛い人、悲しみにくれている人や、自分と違った他人の立場や世界に、心を寄せ理解しようと努める人間としての余裕と暖かさを失い、環境面でも例えば大阪港から白砂青松が消えるなどの現象が始まった。私どもは、外形的には一見勤勉で真面目によく働く人間であると評されたが、内心では利益と金もうけをすべてに優先させる価値観を倫理とする人間でしかなかった。お金の、お金による、お金のための社会で、人々が金主義という一つの考え方だけで走り、

チェック・アンド・バランスのきかない社会が進行した。ビニールなどの豊かさをもたらす物質が新たに発見されると、予定される利益の前には、それが危険であるかどうかを考える余裕もなく、仮に多少の危険があっても大したことはあるまいといった安易さが支配し、豊かさが進む裏側で次々と大きな公害問題が発生し、それも単純なものから複合したものへと深刻化して行った。さらに、生産技術や流通手段が合理化し拡大した成果として、大量生産、大量販売の時代が現出し、水、空気、土壌などの大規模な汚染やゴミ公害、車公害その他の環境問題が続発するとともに、生命に危険を及ぼす食品公害なども深刻化するに至った。若者は金にならない農業を見捨てたし、農薬や科学肥料は農地を荒廃させた。民有林は植林もままならず放置され、国有林は一斉伐採によって自然生態系の破壊が進んだ。太陽、水、土などの恵みに感謝して生きるどころではない。『ぼくの恋人東京へ行っちゅち。ぼくの気持ちを知りながら、なんでなんで、どうしてどうして』という『泣いちゅち』の唄は、農村の嘆きをユーモアに乗せ、次いでその歌手自体も使い捨てで、嫁飢饉だけが今も後に残っている。世界中から手ひどい

批判を浴びながら、輸入した資材とエネルギーで大量生産と集中豪雨的輸出を繰返し、貿易は自由な筈などと嘯いている。外貨を大量に稼ぎ、好きなだけ食料品を買い込み、食べたい放題食べ散らかして、食べ残しを捨てている。世界の貿易木材の六〇%を輸入して『森喰い虫』と呼ばれ、熱帯雨林の消失という地球環境悪化の元凶となっている。無定見な生産活動に起因する二酸化炭素、窒素や硫黄の化合物、フロンガスなどの多量排出などに至っては、いうに及ばない。環境問題とは、人間の問題である。私どもの現今の豊かな時代とは、人の心の冷たさを拡大している時代である。『家つき、カーつき、ババ抜き』は、今後ますます深刻化する。天敵を失い我がもの顔に繁栄した生物は、餌を失うか又は自ら招いた環境破壊によって没落するもので、生物界には共存が必要である。生きるとは本質的に真剣なもので、真剣に生きるとは、生きるために不必要なものを求めないことである。私どもは、ゴルフの回数を減らし、子供らとともに畑仕事や日曜大工に親しまなければならぬ。子供達に、生きものの尊さに触れ、物を大切にすることを育てるためである。家庭用のテレビも一台に減らし、家庭内の団撃と

人と人との触れ合いを大切にしなければならない。さらにいうならば、社会的に公正の問題を放置しては人の幸せは考えられないし、人間にとっては幸せと不幸せとが共存するのが自然であるし、私どもは死ぬ幸せを大切にしなければならないのである」

植田氏は、石油や原子核などから高度の科学技術で一時に大量のエネルギーを取り出すことによつて成立している現在の工業は、窮極において人間の生存環境の破壊を結束するものであり、地下資源の利用を前提とする工業的繁栄は、恰も自分の母親の胎を切り裂いてその血を搾り取つて生きるような冷たい繁栄で、現今の工業化社会には人の幸せを保証する未来はないとの見解の持主である。一見甚だ極端な厳しい印象を与える見解であるが、私どもは謙虚に傾聴し、検討と考察を加えなければならぬ。そして、人と人と共に生き、人が地球と共に生きて行くような、そして人々が他に優しい暖かみのある気持ちを持ち合うような社会で生きるように努めて行くことが、根本的に環境問題を解決し、幸せを手に入れる所以であるということに思いをいたすべきであると思うのである。

二、身障者の問題について

身障者の問題については、社会福祉法人「京都太陽の家」の事業本部長吉永栄治氏から「障害者の自立——太陽の家での実証」のテーマで見解を伺い、これに基づいて質疑と討論が行われた。伺った見解の内容は、大略次のようなものであった。

「太陽の家は、国立別府病院の整形外科医であった中村裕医師が、師事した英国ルードヴィツヒ・グッドマン博士の影響の下に、『身障者に保護よりは働く機会を』と訴え、昭和四〇年、大分県別府市亀川に創立した社会福祉法人で、機能開発センター、収容授産施設、福祉工場、株式会社各部門を擁し、人員も、当初身障者七名から、その後二〇数年以上を経過した現在、身障者約一〇〇〇名、職員約二〇〇名、パートタイマー約二五〇名に増加し、売上高も合計七〇億円に達し、別府の太陽の家から、日本の、そして世界の太陽の家となっている。太陽の輪は、中村氏逝去後も、『サン・コミュニティ・大神』『愛知太陽の家』『京都太陽の家』などと拡大の一途を辿っており、また、株式会社も、ソニー、ホンダ、

オムロン、三菱商事、日本電装など大手企業が一〇〇〇万円から三〇〇〇万円の資本金の六一%を出資し、太陽の家が三九%を出資する合弁企業として、雇用の確保と作業環境の改善に大きく寄与している。周辺の住民とも、自治会が一緒に、喫茶店、パチンコ店、スーパーも共用で、お互いに融け合い異和感は全くない。創立者中村氏の思想を反映し、働く喜びと事業活動への参加が、身障者の自意識を高めている。過去において、身障者は社会のお荷物であり、健常者の保護の下に健常者と別に生活すればよいとされたが、現在にあっては、身障者は健常者と一緒に社会生活をすべきであり、市民と共に生きて社会に完全に復帰することが身障者最大の希望である。そして、この希望を実現することが、真の身障者福祉である。このような意識改革は、まず身障者自身においてすべきであり、身障者自身も自分でできることは自分でやって行く意識が大切である。また、健常者その他周囲の人々や一般国民においても、このような意識改革を徹底すべきである。身体に障害はあっても、仕事に障害はない。医学的障害と職業能力の評価は、別の次元の問題である。職能開発と、個別作業からライン作業、そしてコンピュ

―ター作業への作業環境の改善が重要である。何よりも一般企業による雇用の増加は最も肝要であり、職業安定所のケースワーカーや職業指導員との相談が望まれる。本来、太陽の家のような身障者だけの施設は、なくなる方が理想である。

身障者のスポーツはリハビリテーションの一環であり、身障者の大分県体育協会や日本スポーツ協会が活躍し、身障者の大分県体育大会、東京パラリンピック、極東南太平洋スポーツ大会、大分国際車椅子マラソン大会などが活発に開催され、国内はもちろん、国際的な身障者の交流にも、大変な効果をあげている』

この問題の主なテーマは、身障者の真の自立とは、経済的自立だけでなく精神的自立をも含むものであって、そのためには身障者と健常者が一般社会において共に生きて行くことが必要であるということであろうと思われる。私どもは、ただいま現在は健常者であっても、いつ交通事故その他不慮の災害などに遭って身障者となるか分からないし、また、高齢者になるに従い、身障者となる運命を避けることができないことに思いをいたすとき、ますますこのテーマの重さと意義の深さを実感するのである。私どもは、私どもの社会を、身障者の立場を理解し

て身障者を優しく暖かく受け入れて行く社会にして行かなければならない。そして、また、そのような社会を築いて行くことが、健常者である私ども自身の幸せを実現して行く所以であることに、思いをいたすべきであろうと思うのである。

三、高齢者の問題について

高齢者の問題については、基本的なテーマを「高齢者と共に生きる」とし、大阪市民生局理事・高齢者対策室長伊藤光行氏と、成安女子高等学校教諭横田哲氏からそれぞれ見解を伺い、これらに基づいて質疑と討論が行われた。

まず、伊藤氏からは、「お年寄りが住みよい街づくりを進めるために——北米の高齢者対策に学ぶべきもの」をテーマとして、大略次のような見解を伺った。

「平成元年一二月に策定された国の高齢者保健福祉推進一〇カ年計画をビジョンとして、各地方自治体において高齢者福祉対策を進めている。高齢者の問題は、福祉、保健、医療、住宅、生活環境、交通手段などの総合的見地からの処理が必要である。高齢者は、自分が住み慣れた家と地域で、家族や地域の人々と共に安心して生活したいと願っており、これを充たすのが高齢者福祉である。ロサンゼ

ルス、バッファロー、ウイニペグなどにおける高齢者の状況を視察した結果では、高齢者の人柄、生育歴、生活歴、将来の希望などの個人的要素を尊重してその人に適合したサービスを提供するというノーマライゼーションの理念が行き届いているだけでなく、健康チェック、三度の食事の世話、リハビリテーション、日常の機能訓練などが施設と在宅で同様に処置されているし、生活実態や物的環境を調査して総合的判定を下し専門的なアプローチをする職務と職権が一人のワーカーに集中して迅速かつ効果的な措置が期待できる反面で、本人や家族がやるべきことはきちんとやらせて甘えを許さない自己決定の考え方が徹底している。高齢者の中では、独り暮らしや寝たきりの人達が問題であり、なかんずく独り暮らしで寝たきりの高齢者は、極限状態にある困難な人達である。寝たきりの高齢者をつくらないことや残存機能を落とさないようにむしろ改善して行くことが、本人のためにもまた家族の介護負担軽減のためにも必要であるが、我が国の住宅は面積や構造上問題が多く、寝たきりの高齢者をつくつていようなどころがある。我が国の老人ホームや病院については、孤独感や寂しさの軽減や解消、家庭と同様の

生活環境の作出、エモーショナルリーとか感情的動揺への支援などの問題があるし、在宅の場合は各種サービスのコーディネートをどう進めるかが今後の課題であろう。ハードとソフトの両面に亘りシステム化を進めて行かなければ、二一世紀の高齢者問題は乗り切れないのではないか。資金や奉仕活動の提供だけでなく、高齢者の気持ちを受け止める心の提供といったボランティア活動の充実も大切であるし、職員の人材の確保と激励なども肝要である。世代間の交流も大変有効で、小中学生の特別養護老人ホームの泊まりがけ体験学習など、もっと実施されることが望ましい。高齢者にとって、若年壮年の現職時代から自分の生き方を持つことが、老後の生きがいを確保する所以であろうし、平生から自分の欲求を社会に還元して社会的欲求に転換して行く自己実現の訓練をしておくことも、充実した老後のために必要であろうと思われる」

次に、横田氏からは、「独り暮らし老人を訪ね歩いて二五年」をテーマとして、大略次のような見解を伺った。

「戦後の我が国の経済成長が、老人を捨てた。効率万能の産業社会で、貧困は

解消し経済は豊かになり国民の寿命は延びたが、家族は崩壊し地域は連帯感を失い、人々は皆自分のことしか考えず私利私欲に走っており、このようなことでは福祉は実現できない。子供とすら話をする時間のないサラリーマン地獄は、福祉とは無縁である。現在の福祉は職業化し、一般の人々には老人に対する愛も優しさも関心もない。その結果、老人は、子供や地域は頼りにならないと感じ、行政にも限界があると感じている。福祉とは、制度でなく、心である。愛と優しさである。愛とは忍耐深く自分の相手を知るように努めることであり、優しさとは読んで字の如く人を憂うることである。福祉とは、語り合い、肌のふれ合い、心のふれ合い、共感のし合いである。人類愛、同胞愛なくしては、福祉はない。私どもの幸せとは、自分を忘れて希望を以て人を愛することである。机の前に坐っているだけでは駄目で、自分から出掛けて行く出前福祉でなければならぬ。老人福祉とは、世の中の片隅で、愛情と生きがいと好意に生きることである。私どもは、いつかは他人の厄介になるものであるが、厄介になるなり方の問題である。寝たきり老人と元気老人とは車の両輪で、これらをどう支えるかが問題である。

趣味、旅行、食事など明るい話題に老人は集まる。暗い話題は深刻だが、見捨ててはいけない。立派な施設を作っても、地域との交流がなければ、老人は孤立する。老人から歴史、生活の知恵、愛、よい習慣などを学ぶことは、すぐれた交流である。ボランティアを大事にし、表彰をしたり、激励や慰めの会を開くことが大切である。老人は心の故郷である。老人には、尊い人生、ドラマ、下り坂の哲学がある。老人は、一寸したことに喜び、小さな一言で安心し、感動に生きている。老人は孤独であるが、よい意味での諦めを持ち、美しい老後を願っている。何でもよい方に解釈し、尊敬を受けたいと願い、刺激を大切に、生活を楽しむ、料理や趣味を勉強し、花や夕陽に感動し、老人ボランティアに打ち込む。そのような老人への個人的な孝行が困難であれば、社会的孝行を尽くせばよい。地域が面倒を見ることである。また、元気な老人が病弱老人の面倒を見てもよい」

伊藤、横田両氏の見解を伺ったのち、出席者が行った討論の内容は、大略次のようなものであった。

「家庭は、痴呆、介護、経済、生きがい、孤独などの老いの問題を支えること

ができるだろうか。人生のデザインという考え方によれば、人間二〇歳までは学
びの人生、二〇歳から六〇歳までは職業の人生、六〇歳から八〇歳までは文化の
人生であり、二〇歳から六〇歳までの職業の人生の自由時間は七二〇〇〇時間、
六〇歳から八〇歳までの文化の人生のそれは七三〇〇〇時間であつて、如何に高
齢者の世代が大切であるかが分かる。国際ロータリー第二六六〇地区七二クラブ
のうち、七〇歳以上の会員のいるクラブが六六、八〇歳以上が四四、九〇歳以上
が九に達している。独り暮らし老人の生きがいを支える大切なものは、外部からの
便りであるが、子供、家族、近所、公的サービスのいずれも受けられない老人が、
二〇%を占めている。比較的元気な明るい老人は、八〇%に達している。独り暮
しや寝たきりや病気の老人は、問題の暗い部分であるが、ロータリーとしても、
徒らに困難視せずに、ボランティア活動などによつて、一層の検討と努力を重ね
なければならぬ。元気老人については、定年の延長、自身によるボランティア
活動、シルバークラブの提唱などが考えられる。従前の六〇歳以上や六
五歳以上という高齢者の定義は若過ぎ、現在では七〇歳以上か七五歳以上とすべ

きである。定年退職後一定年限、一定の条件の下に、ボランティア活動を義務付けてはどうか。ボランティア銀行を設け、登録してカードを発行し、相互扶助の精神で奉仕した年数だけ奉仕を受けられるようにしてはどうか。七〇歳以上の高齢者は圧倒的に女性が多く、その六〇％は配偶者を失っている。配偶者のない人達の四分の三が女性であるから、高齢者問題は政行状態で、女性に比重が重い。ボランティアの人達とのフォーラムや対話を充実し、激励するように努めたい。長寿と長命とは異なる。徒らな長命には意味がない。病院ロビーの老人サロン化は、問題である。共に楽しみ、共に学び、人のために尽くすという理念を持って生きる事が、真の長寿である。人々のコミュニケーションを広め、意欲を高め、色々な会合に出てお世話をし、常に創造性を持って、物事を明るく見るといふロータリーの特徴を、高齢者の問題にも生かして行かなければならない」

私もは、右に要約したとおり、今後の高齢者のあり方について、制度や施設の両面に亘って、如何に努力すべき問題が多いかを知ることができた。また、比較的元気な老人のためにですら、まだまだすべきことが多く残されていることを

知つたし、独り暮しの老人や寝たきり老人など、極限状態にある老人の問題を、ロータリーとして到底力の及ばない問題だと決めてかからずに、もっと調査研究と努力を重ねて行かねばならないとの自覚を強く促されたのである。

すでに述べたように、私どもが当面している我が国の高齢者の問題は、社会に占める鼠的な比重においても、また内包する諸要素の質的な性格からしても、歴史にかつて前例をみないものであつて、この問題への対応なくしては、今後我が国における社会的活動自体が、その視点と行動の基準を欠落することとなるといつても、過言ではない。しかも、この問題は、幼年期から青少年期、壮年期を経て熟年期に至る私どもの人生の全過程のあり方とその成果に対し、総合的に与えられる総括評価である。まず、私ども個々人が受けた教育は決定的な素因となるし、次に、その個人が経由した個人的な、職業的な、そして社会的な諸活動のすべてが、その素因となるであろう。また、その個人が生きてきた生活上の環境と自然や社会的な環境を含めて、精神と肉体の両面に亘る生活の内容も、その素因となるであろう。そして、その高齢者が現在置かれている生存の条件自体が、間

題解決のために必要な内容と手法を定めるものとなろうし、また、結果的には、最後にすべてが身障者を含めて障害者一般の問題に帰着する可能性を濃厚に帯有しているであろう。しかも、私どもロータリーが求める人の幸せが、この問題の解決のあり方と致命的なかかわり合いを持っていることに思いをいたすときに、高齢者の問題が私どものロータリー活動において占める比重の重さへの実感をますます深くするのである。

(一九九二年三月)

大学における教育と研究の課題と

ロータリーの役割について

— 地区大会の大学間題シンポジウムを契機として —

私どもは、我が国が世界一、二の経済大国に成長し、この成長を支えたのが世界一流の科学技術を中核とする我が国の高度の文化的な諸成果であり、この世界一流の文化的成果を生み育てたのが我が国の大学であり、従って日本の大学は世界一流の大学であると簡単に考えて来た。しかしながら、私どもは、色々な識者の発言を聞き、数多くの資料の提供を受けた結果、事態は決してそのような生易しいものではないこと、極端な言い方をするならば、我が国の大学が将来に向かってむしろ危機的状况にあることを知ったのである。大学における教育と研究の水準と内容こそは、その国の精神的資質とその表現としての文化の質を適確に示すバロメーターであるから、このような我が国の大学の状況は、私どもにとつて

看過することができない由々しい事態というほかはない。

例えば、サンケイ新聞の前後五部、七八回に亘る連載特集記事「大学を問う」や、一九九一—九二年度RI第二六六〇地区の地区大会における大学問題シンポジウムの内容などを総合すると、大学における教育と研究の体制を確立し推進すべき中枢である筈の学長職ないし総長職は、一つの名誉職として形骸化し空洞化し、人事及び予算などの権限の大半は、文部省による官僚的な管理と大学の自治という名の下での教授会の支配に委ねられ、殆ど機能していないといわれる。次に、教育と研究を現実に担当すべき教授以下の教員についても、その資質の本来的保証が十分でないことはもちろんのこと、その努力や業績の適切な評価と人事への適確な反映の保証も極めて不十分で、終身雇用を前提とした無風の閉鎖的環境の中にあつて、創造性とは無縁の惰性のみのいわゆるブラックホール・プロフェッサーなどの存在が極めて憂慮すべき事態にあるといわれる。また学生自身も、牢固とした学歴社会を目指し、入るに難く出るに易しい我が国の大学制度に依拠して、画一的な偏差値偏重の至難な入試の壁の突破に精力を注いだ後は急激に勉

学の意欲を失い、漫然と講義に時間をつぶしアルバイトに精を出す無気力な学生生活を経て、留年を警戒する大学の方針により難なく卒業し、企業社会もまた学歴以外にはさして意を用いずに安易にこれを受け入れる結果、適正な学力の評価や厳しい学習の成果を学生に期待することは殆ど不可能な状況にあるとのことである。さらに、このような一般的な劣化要因に加えて、講座制という硬直した教育研究体制、産学協同体制への学園紛争以来のいわれないアレルギー、絶対量に著しい限界があるだけでなく運用配分面でも硬直し切った研究予算、改善と新設への投資の絶対量が不足した貧雑の研究施設、民間財団の未成熟、不透明な人事など諸々の事由に起因する研究環境の不備のため、大学や大学院における先進的研究体制の推進はもちろん、米国流のポスト・ドクトラル・フェロー（いわゆるポスト・ドク）と称せられる博士研究員や、日本版ポスト・ドクである特別研究員などの制度も、実効性ある定着を進める状況にはないといわれる。その結果、若い優秀な研究頭脳の大学院離れや海外流出が続出し、我が国の企業は冠講座その他海外大学への研究投資に傾斜し、最も肝要な基礎研究分野の荒廃は進む一方で

あるだけでなく、すべての学問に生命を与えるべき一般教育の不備はもちろんのこと、最も基本的な学問の存在理由を構成すべき人間教育自体の欠落も、放置されたまま全く顧みられもしない現状にあるとの指摘がされているようである。こうして、我が国の大学は、明治以来の知的ストックをひたすら消費しつつし、構造的な劣化の一途を辿りつつあり、米カリフォルニア州立大ノースリッジ校ジャック・ゴーマン教授の、米国を除く世界の大学ランキングによれば、東大ですら第六七位という状況であるとされるのである。このような課題に対する対策が問題点の一つ一つを逐次解決して行くことにあることは当然であるが、私は、ちょっと視点を変え、この問題の周辺から若干マクロに事態を眺めてみたいと思う。

周知のように、私どもの一生は、大変な競争の体質で貫かれている。その前半は学校教育であり、後半は職業生活である。三つ子の魂ではないが、私どもが受ける学校教育は、早々と物心がつく以前の三歳から始まり、幼稚園、小学校、中学校から高等学校に至るまで、学歴社会を控えてよりよい大学への入学を目指し、学習塾による訓練を当然の前提とする知能一辺例の激烈で画一的な競争教育に終

始している。そこには、柔軟な個性と社会性を目指すすぐれた精神的資質を養う機会と余裕は殆ど存在していない。大学卒業後の職業生活は、企業であれ、行政であれ、公私の団体であれ、専門職業の領域であれ、業績の向上とシェアの拡大のみを至上命令として、内外共に、ひたすら外面的な社会的成果だけを追求してやむことのない、激甚な競争体質社会に終始している。そこには、自己や家庭やそのあり方などを顧みるいとまは、殆ど存在していない。

この学校教育と職業生活という二つの決定的な強烈な競争の世代に挟まれて、氣息奄奄と介在している世代が大学の世代である。また、この二つの競争の世代の後に、ともかくにも氣息奄奄と接着して辿りつく予後の世代が高齢者の世代であろう。従って、大学と高齢者という似ても似つかぬこの二つの世代に、実は極めて共通した体質があるかと思うのである。外面的な過度の競争によって真の自己の発見とその生育を阻げられ、極端な場合は殆ど自己を喪失して個性的な意欲を失い、疲れ切ったただ無気力に時を過ごしている世代であるという点である。本来であれば、前者は洋々たる人生の展開を控え最も夢と意欲に充ちた世代

である筈であるし、また、後者は充実した人生の後に来るべき体験に充ち足りた味わい深い世代である筈であるのに、現実はいこれらの期待を完全に裏切っているのは何故であろうか。私は、その改善ないし救済の対策は、結局において、その前後を占める二つの大きな外面的な生産世代の競争体質自体に思い切ったメスを入れる以外には、ありえないのかも知れないと思うのである。さらに考えるならば、私ども日本人の精神的資質自体に、欧米的思惟を深めて行く上での体質的な限界があるのではないか、或いはもっと一般的に、文化面での私どもの精神的な活性の資質自体に限界があるのではないか、そしてこれらが日本の大学を今日の事態に陥らせた根本原因であり、従つてその改善は実は容易ではないのではないかとの懸念さえ抱くものである。

社会主義の手法の歴史的終熄を迎え、世界の政治と経済の体制は、資本主義と社会主義及びその各修正形態の二極の対立から、資本主義の修正的な手法相互間の多様多極な対立へと、構造的に音を立てて移行しつつある。数多くの有力な精神生活の傾向も、その例外ではありえないであろう。そして、私どもが先進的な

指標として疑いも抱かずに無自覚に受け入れて来た欧米的な価値観自体が、来るべき二一世紀に向けて、現在大きく揺らいで来ている。人間の欧米的資質のごく一部を異常に拡大した科学技術の開発をとめどもなく進行させ、欧米的な社会意識に立脚した社会の集団管理技法などの合理的成果を定着させることによって、一途に快適社会の達成を進め、その一段の充足を以て進歩と受け止めるというのが、在来の価値観の主たる要素であったと思う。しかしながら、たゞいままでは、そのこと自体の再検討がすでに必要となつて来ていると思うのである。現に教育実務の場においても、カリキュラム編成の底流に存在すべき哲学のあり方、専門教育に生命を与えるべき一般教育のあり方、例えばアメリカ流のリベラル・アーツ教育などの受け止め方、教育におけるアカデミズムないしは学問自体のあり方、そして最終的に大学の本質は結局は社会の本質に帰着するとの認識の可否などについて、各方面でさまざまな論議が深められつつあることは周知のとおりである。

私どもの社会を構成するハードとソフトの両面に亘るこのような急激な変貌に伴い、ロータリー活動が対象とすべき各種の社会問題の内容自体も、また、対応

すべき手法のあり方も、複雑化と多様化の一途を辿つて来ているし、従来の人間尊重、地域発展、環境保全、協同奉仕といった分野別の区分に拘泥することなく、もつとボーダーレスな視点から、その内容や手法について、弾力的な検討を加えて行くべきであろう。例えば、教育の問題なども、学校教育、家庭教育、職能教育、社会教育のいずれを問わず、ロータリーが社会奉仕活動の一環として取り上げるべき古くて新しい性格の問題である。何故ならば、教育のあり方こそは、単に私どもが手にする生活技術とこれを媒体とする豊かさや文化の問題であるだけでなく、もつと根本的に人の心を直視する最も重要な課題である苦であるからである。このような見地から、私どもは、とりあえず具体的な第一着手として、大学における教育の問題を取り上げ、我が国の大学が緊急に必要な施設の整備及び研究の推進等の全般に亘り必要な資金的支援を行いつつ、さらに我が国の教育の抱える問題の調査、検討及び必要な提言を行うことを目的として、我が国のロータリーの中に、新しい基金の設定ないしは財団の設立などの活動の拠点作りを早急に構想しては如何かと考えるのである。

(一九九二年三月)

青少年への奉仕

周知のように、青少年への奉仕の目標は、成長過程にある青少年に地域社会がどのような影響を及ぼすか、また、青少年にとって健康や均衡のとれた教育や精神的資質や職業の問題などが如何に重要であるかを認識するとともに、青少年に地域社会に対する個人的責務と社会の一員としての善良な市民精神を自覚させ、かつ世界への理解をはぐくんで他国民に適正な態度をとることを推進すること。青少年とロータリアンや年代の異なる他の人達や他国の青少年との直接間接の接触とこれを実現するための手段方法の検討と促進をはかることなどであろう。

ロータリーは、このような青少年への奉仕活動として、ロータリー青少年指導者養成プログラム(Rotary Youth Leadership Awards、略してRYLA)、インターアクト・クラブ(Interact Clubs、略してIAC)、青少年障害者(Youth

Disabilities) などの固有のプログラムを用意するほか、職業奉仕部門における就職相談、職業指導、職業情報、職業活動表彰などの小委員会の活動は青少年にとって特に有益であろうし、社会奉仕部門のローターアクト・クラブ (Rotaract Clubs、略してRAC)、国際奉仕部門の国際青少年交換 (International Youth Exchange)、研究グループ交換 (Group Study Exchange、略してGSE)、ロータリー財団の国際親善奨学生、ロータリー米山記念奨学会の奨学生など、各部門に亘り各方面から随所に実質的に、青少年への奉仕関係のプログラムを予定している。

ロータリーは、このような青少年への奉仕活動への視点として、まず、青少年という極めて特性ある世代を、社会奉仕活動、なにかんづく人間尊重の分野の活動の対象の一つとして捉えている。そして、さらにそれだけでなく、より大きな視点を予定しているといわねばならない。すなわち、ロータリーの奉仕活動全体を一つの現実的社会的活動として捉え、綱領、サービスの理念、職業宣言、四つのテストその他に集約されるロータリーの精神的価値とともに、一体としてこれを

次代を担う青少年の世代に伝え、その理解と体験を通じて、将来におけるロータリーの存在とその奉仕活動を深め活性化して行くための準備と基盤の形成に努めるといふ側面である。そして、これは、むしろ個々の奉仕部門を超える、より包括な根本的な性格をもつ分野であると考えるのである。「各ロータリアンは青少年の模範である」といふ標語は、そのような意味に理解すべきものと思われるし、「子は親の後ろ姿を見て育つ」といふ諺の持つ怖さも、そのようなところにあるうかと思うのである。

(一九九一年八月)

V
国際的な社会とロータリー

国際奉仕と世界理解についての若干の考察

人は、自らとその周囲の人々の幸せな生き方を求めるために、社会に向けて色々な作業を働きかけていくことになるが、このような社会奉仕活動も、対象とする社会が地域社会や国内社会から出発して国際社会となると、民族とか国家、或いは言語、宗教、生活習慣や社会意識、価値観の相違といった障壁の克服がまず大前提となつて来ることはいうまでもない。それでも、私ども個人の生き方が、一国の社会にとどまらず、国際的な規模の条件に左右されることとなつた現在の状況に対応して行くためには、私どもは、勇気をもつて、私どもの社会奉仕活動の場を、国内社会から国際社会の場にまで拡大して行かなければならない。ロータリーの綱領の第四に掲げられている「国際間の理解と親善と平和を推進すること」との課題は、今後ますますその必要性和重要性を増して来るものと考えらるも

のである。

ところで、国際社会における奉仕活動自体は、国内社会における奉仕活動と本質的には何ら異なるところはないと思われるが、前述したような種々の国際的な障壁を解決し克服することが、すべてに優先する前提となつて来る。そこで、まず第一の段階として、相互の理解を深めることが必要となるであろう。相互の理解がなければ、国内の場合のように知り合いを広めることは不可能であるからである。しかしながら、単なる理解の域だけではまだ不十分であつて、次に第二段階として、相互の親善が実現するところまで行かなければならない。単に理解したというだけでは、何らの積極的な行動を伴わないからである。いってみれば、国内社会の場で知り合いを広めるとは、国際社会の場では理解と親善を実現するということであろう。さらに、個人的な人間関係の域を超え、最後に第三の段階として、国際社会全般の平和的な状態が実現し永続するよう努めなければならぬのであろう。一元的に治安が管理される国内社会と異なり、国際社会にあつては、多様な性格の各種規模の紛議や紛争が顕在的に発生し、また潜在的に存続す

るのが常態である。従つて、このような紛議紛争のない平和な国際社会を実現し維持することは、世界人類の福祉に奉仕するロータリーが国際社会に奉仕する活動の、極めて重要な部分を占めるといふべきであろう。ただ、そのような平和を実現し維持するためには、私どもは、現実の手段として色々な奉仕活動を推進して行く必要がある。基本的に平和の意義と価値を正しく認識する世論を高め拡げて行くための努力を尽くすことを手始めとして、現実の紛議紛争の芽を未然につみ取つてその発生を防止する努力や、すでに発生した紛議紛争の拡大を防止し被害を軽減し救済する努力などを、特定の政治目的や武力行使の影響と関係しない場において提供して行く直接的な奉仕活動はもちろん、平和の実現と維持のための障害を除去することを目的とする努力などの間接的な奉仕活動、例えば、国際的規模における疾病、飢餓、人権侵害、環境破壊などの被害自体の救済と解決や、劣悪な保健状態、教育の不備や低い識字率の放置とこれらを原因とする福祉や平和などの文化観念の欠如、とめどもない人口増加とこれに伴う慢性的な広域的被害などを改善するための継続的な奉仕活動などを、粘り強く総合的に推進し

て行くことが必要であろう。ロータリー国際親善奨学生その他の各種の奨学金、GSE、同額補助金、3Hプログラム、ポリオ・プラス、平和プログラムなどのロータリー財団プログラムや、ロータリー米山記念奨学会、世界社会奉仕、国際交流、国際青少年交換、ロータリー友情交換、世界親睦活動などの多種多様な国際奉仕活動も、このような綱領の視点から、その意義とあり方をもう一度問い直してみる必要があるかも知れない。いずれにせよ、そのすべてはロータリアンと世界の人々の心の結び付きに基づくものであるし、その多くはロータリアン自身の直接の草の根のかつ手作りの仕事であって、そのことは、ロータリーの国際奉仕プログラムの誇りというべきであろう。ただ、我が国においては、ロータリアン自身を含めて、家庭や集団の多くが依然として閉鎖的であり、ホームステイなど個人的接触が重視される各種の国際奉仕活動の障害となつてゐる実情は、否定できない。我が国の真の意味における国際化を推進するためにも、国際奉仕活動の大前提として、早急にその原因の解明や現実の手法の検討などが行われ、具体的な改善の努力が払われるべきではないかと考える。

世界はすでに社会主義の手法の終熄を迎え、各種修正主義のあり方について一段と論議が深められる時代に入っておろうかと思う。アメリカのみならず、E.C.、北欧、ラテン、アラブ、我が国を含むアジア、アフリカ、スラブ、東欧など、世界の各国や各地域社会の色々な人達の社会意識や価値観について、共通点と相違点や、それらと人類の幸せとのかかり合いのあり方などについて謙虚な充実した論議が交わされ、総合的な視点を目指して議論が深められて行かねばならない。アメリカの社会意識を前提として出発したロータリーも、ロータリーの国際化に伴い、その思想の域内に安住し停滞することは許されない。今後はこのようなグローバルな国際理解の基盤を構築することに努めつつ、世界人類全般の真の福祉のために一段とその存在意義を高めて行くことよってのみ、ロータリー・インターナショナルは、初めてその名に恥じない本格的な社会的実在としての名誉と実質を備えたものとなるであらう。そして、このような努力が、現在のロータリー・インターナショナルと私ども個々のロータリアンに課せられた歴史的課題であらうかと思うのである。

(一九九一年二月)

国際奉仕をめぐる若干の視点

周知のように、資本主義やその修正的な手法に避けられない社会的公正解消の不徹底さを根本的に解決し、人間の顔をした社会を実現するために、共産主義や社会主義の手法が、一部の人々によって案出され断行された。その結果、二つの体制によって仕切られた冷戦構造という政治、経済の壁の存在を既定の事実として、両体制間の武装平和と、それぞれの体制内部の限定的な平和が平和であるとの意識によって、私どもは第二次大戦後半世紀近くを経過して来た。そして、私どもロータリアンも、そのような意識を前提としつつ、国際間の理解や親善や平和を考え推進せざるを得ない立場に置かれて来たわけである。

ところが、この共産主義や社会主義の手法は、競争本能をはじめとする人間性の本質の相当部分を一般的に一樣に外的に否定し去ろうとする根本的な試行錯誤

であったために、歴史的な必然の経過を経て最近漸く終熄を迎えようとしている。そして、これに伴い、アメリカとソ連の二大超大国を盟主とする冷戦構造が崩壊し、両体制の力による均衡秩序とこれを前提とする武装平和や限定平和の体制も徐々に解消し、世界の各地において、新しい国家秩序の確立や少数民族の独立その他多様な規模と性格の紛争が数多く続発する一方で、多角的な経済秩序の検討や開発と環境をめぐる諸問題などが、新しい様相をもって国際社会に次々と登場して来ている状況にある。

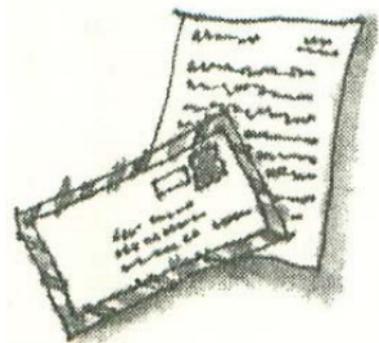
このように従前の政治、経済の体制が激変した結果、アメリカだけが唯一の超大国として現時世界の政治、経済の秩序を維持する盟主の地位を保有しているとの見解が一部にあるものようであるが、果たして如何なものであろうか。共産主義や社会主義の手法は、資本主義やその修正的な手法への批判ないしは救済的な手法として案出され実行されたものであるから、その否定は資本主義やその修正的な手法への単純な復帰を意味するものではないからである。私どもは、すでに、私どもの社会を人間の顔をした社会とし、私どもに真の幸せをもたらすものとす

るため、従来の両体制では実現できなかつた新しい考え方を必要としているのではないであろうか。そして、アメリカは偉大な国であるが、現在そのような新たな精神的活力を保有しているとは到底考えられないのではなからうか。

もはや世界は、それ自体が一個の広域的な地域社会と化しており、この世界という一つの広域的な社会における人々相互間の理解と親善と平和は、多数の国家や多数の民族相互間の協議や折衝の努力を通じ、世界の人々によつて等しく考えられ、求められ、推進されねばならない。ここでは、体制間の武装平和とか体制内の限定平和とか秩序の均衡といった諸々の限定や条件は、無意味であるだけでなく、有害である。私どもは、数多くの国家や民族の人々との間において、等しく人間として、相互に平面的な本質的に対等な立場で、言語、習俗、経済、教育、宗教、文化、社会意識、価値観などの相違を乗り越え、相互の理解と親善を深め、仮定や限定のない草の根からの其の平和を実現するよう努めて行かなければならない。換言すれば、真の意味において、ロータリーが求める国際間の理解と親善と平和を推進すべき時代が、正に到来したわけである。また、その意味において、

国際青少年交換、GSE、ロータリー財団の国際親善奨学生、ロータリー米山記念奨学会の奨学生、姉妹クラブ、友好クラブ、ロータリー友情交換、世界親睦活動など国際交流のための諸々のプログラムは、ますます本格的に活性化されねばならない。また、世界社会奉仕活動やロータリー財団の各種人道的教育的プログラムなども、今後ますます本格的な生命を与えられ、その存在意義を高めて行かなければならないと考えるのである。

(一九九二年四月)



国際間の交流と理解

先年、私が所属している大阪北ロータリー・クラブが、姉妹関係にある韓国の南ソウル・ロータリー・クラブ及び台湾台北北ロータリー・クラブとともに、三クラブ合同で韓国済州島においてフォーラムと懇親会を開催し、私も出席させて頂いたが、その際感じたことは、この三クラブの間でも、年々言語上の障害が効果的な交流の支障となつて来ているということであつた。韓国や台湾のロータリアンの方々でも、私どもとほぼ同年代前後の方々は、まことにこまやかな日本語で接して頂き、極めて円滑な交流の実をあげることができた（実は、そのこと自体にすでに問題があると思うのだが）が、比較的若い特に三十代の会員の方々は殆どといつてよいほど日本語をご存知なく、流暢な英語で話される（実は、これもまたそのこと自体にすでに問題があると思うのだが）が、私どもは英語の会話が

苦手であるために、相互の意思の疎通に大変困惑し苦労した。それに、会議の方は同時通訳で処理できるとしても、懇親会の方はその方法では殆ど処理が不可能である。しかも、このような傾向は、今後ますます深まることが予想され、若い世代の交流を大切にといいながら、今後の国際間の交流と理解を推進する見地から、非常に深刻な課題であると痛感した次第である。

ところで、言語上の障害の克服は、国際間の交流と理解を实效あらしめるために不可欠の作業であるが、克服すべき障害の対象たる言語の相違は、まず表層に現実の表現上の相違があり、その下にこれを支える言語感覚上の相違があり、さらにその底流には社会、経済、思想、学術、芸術などの文化全般に亘る諸要素とこれらを通じて流れる生活上の感覚的な相違があると考えられる。そこで、通訳とか翻訳といった作業は、直訳という単なる表現上の移し換えではなく、言語感覚や各面に亘る生活感覚上の相違を適切に克服し消化して行われるものでなければならぬ。従って、このような成果は、言語を異にする対話者の一方又は双方の個人的努力によつて、たまたま手に入れられることを期待すべきものでは

ない。言語を異にする対話者の一方が、相手の言語を曲がりなりに習得してその言語によって会話をするとか、言語を異にする対話者が、例えば英語といった特定共通の第三言語を共用して会話をするなどの手法については、一般的な見地から、得られる理解の限界に歴然たるものがある。異なる言語の奥にある文化的諸要素の相違の克服と相互の理解こそが、真の価値ある国際間の交流やその成果たる国際理解であろうと思うが、それらの成果は、単なる安易な言語上の表現の移し換えなどでは、到底実現できないものと思われるからである。

世界は、社会主義体制の崩壊に伴い、半世紀に及ぶ二極対立の冷戦構造という仮設的構成の中の均衡平和や武装平和などの観念から漸く解放されたが、解放されて現実を眺めてみれば、政治、社会、経済のグローバル化の進行に伴い、世界が一つの大きな地域社会と化しつつある一方で、欧米的教育の広域的な普及に伴い、各民族、各種族、各地域社会の集団や各個人の個別化が進行し、相互の交流と理解が却って困難になりつつあるやに見受けられ、世界の人々の心の結び付きを基礎とする真の平和への道は、なおますます遙か達しの観を深くするものである。

る。

このような実態の解決のためには、何はともあれ、言語上の障害を解消する努力が必要である。言語を異にする各対話者は、それぞれ本国語で存分に意見を表明することができ、優れた文化的要素を身に着けた通訳によつてその真意のこまやかな相互伝達が行われることが保証されねばならない。現在のように、私ども日本人にたどたどしい英語でアメリカの人々と直接会話をはかる努力が期待されるようなことが、恒常的な現実として固着してはならない。私ども日本人と例えれば中国人の双方が、相互に第三国語である英語を用いて会話をするなどといった当を得ない努力が恒常化するといった事態も、同様に期待されてはならない。いずれも本国語で話をし、すぐれた通訳によつて正確にこまやかに相互に媒介伝達されるのが期待されねばならない。このような意味において、私どもは、通訳の仕事を担う人々の育成に格段の意を用い、その活動に高い社会的価値を与えなければならぬ。何故ならば、通訳を担う人たちがこそが、真の国際間の交流と、相互理解の促進と、長期的視野における揺るぎない世界の精神的平和の確立の先

導に、広域的に寄与する者であるからである。

ロータリーが綱領第四に謳い上げている国際間の理解と親善と平和の推進から、ロータリーの考え方自体の発展や普及に至る成果も、たとえ非常に多額の費用と多大の手間と時間を必要とするとしても、このような言語上の障壁を徐々に除去して行くという地味ではあるが基礎的で根本的な作業に着手して粘り強く遂行して行くことによつてのみ初めて期待できるわけで、このことが現在のロータリー・インターナショナルに課せられたすぐれて現代的な課題であろうと考えるのである。

(一九九二年六月)

今後の国際理解に向けての手法のあり方

ロータリーの翻訳文献ほど分かりにくい文章はないということは、日本のロータリーにとって、むしろ常識となっている。手続要覧しかりであり、「ロータリーの友」のR I指定記事などしかりである。そして、その原因はおおむね直訳文体にあるといわれているが、問題はそのような単純なものではないと思われる。思うに、表現としての言語の基礎には、何をどのように表現しようかという言語感覚があるであろう。そして、その言語感覚の底流には、さらにその社会の文化的な諸要素とかそれらを通じて流れている生活感覚があるろう。従って、翻訳にあたっては、生活感覚までは無理としても、せめて言語感覚くらいからの対応伝達を伴わない限り、真の理解は困難であろう。現在のロータリー文献の翻訳作業にこのような問題意識が必ずしも十分でないか、或いは現実の対応が困難であると

ところに、翻訳文献が分かりにくい真の原因があるのではないかと思うのである。

では、さらに進んで、例えば英語と日本語との間で、その基礎となり底流となつてゐる言語感覚なり生活感覚が、何が故に、どのように異なつてゐるのであるうか。私もが日常経験するところによると、西欧の人達やこれらの人達を祖先とするアメリカの人達など欧米の多くの人達の思考は、科学的、分析的、具体的、説明的、個人主体的で、このような特色は、自然科学、医学、工学、工業技術、社会科学、社会管理技術はもちろんのこと、音楽、絵画などの芸術上の成果から、個人生活や社会生活を支える言語、習俗その他一般の生活感覚に及び、その基本的性格は、必然的に完全に表音化の域に進んだ文字の使用を前提としつつ、人間の存在と行動のすべてが、個人を起点として、説明的な表現による合理的な伝達と理解が可能であるとしてゐる点にあるうかと思われる。これと比較すると、わが国や中国の人達など東洋の多くの人達の思考は、感覺的、一体的、全人的、精神的、抽象的で、分析や科学になじまず、周囲への反射的な適応にすぐれ、このような特色は、学問、芸術、個人生活、社会生活から生活感覚に及んでおり、そ

の基本的性格は、必然的に多分に形象的な要素を残した文字の使用を前提としつつ、人間の存在や行動の多くの本質的部分が、直覺的で象徴的な理解以外に説明的な表現では理解と伝達が困難で、個人を起点とすること自体にも必ずしも必然性はないとしている点にあるように思われる。そして、このような両者の相違には、比較的左脳が理性的で右脳が感性的といった大脳の左右両脳の分化とこれに伴う左右差や左右の非対称性といった人種的素因とか、さらには歴史的な或いは社会的な素因が加わった民族的資質の相違といった原因が介在するのも知れないし、いずれにせよ、その相違の実態は、相当に深刻なものがあると思われる。従つて、文献の翻訳はいうに及ばず、一般的な相互理解自体も、相応の困難を伴うことが当然に予定されると思うのである。

ところで、欧米的資質は、合理的な学問や芸術の創造と普及、科学技術の開発や社会管理技術の策定と実施などを通じて、人間の快適生活の実現に極めて適切かつ有効であり、私どもはその前提とする社会意識や価値観と、これらによつてもたらされる成果を先進的なものとして殆ど無批判に受け入れ、ひたすらこれを

学習して追従し、さらにこれを超えることに至上の目的を置き、学問、芸術、科学技術の分野はもちろん、生産、流通、消費の各面の経済活動の管理から、民主主義体制による社会管理の分野など、活動の全般に亘り、多角的な努力を継続して傾注して来た。ところが、欧米的資質は、その性格上、人間中心でしかも個人中心の価値観を前提とするという限界があつたために、その開発が進行するに伴い、地球は人間のためにだけ存在し、社会はまず個人のために存在するといった分裂的な見解が当然のこととして私どもの意識の中に定着し、その結果、広汎で深刻な環境問題を惹起し、それも地球規模の物的な障害から、社会的な拡がりの中での心の障害に及ぶといった状況で、個人や社会の幸せに資する管であつた資質の開発が、却つて人間を無視した数々の自然的な社会的な被害を私どもにもたらすこととなつていたのである。

ここにおいて私どもは、徒らに西欧的資質を前提とした従前の社会意識や価値観のみに追従することから立ち止まり、人間は地球と共に生きねばならないという至極当然の真理に思いをいたしつつ、地球上の色々な民族の持つ多様な資質と、

多様な社会意識や価値観に思いをいたし、地球化した人間社会の管理のあり方、換言すれば、二極対立の政治体制の枠組みが撤去された後における真の平和のあり方に思いをいたさねばならない。そしてその結果、私どもが今後とりうる手法は、色々あるうかと考えるのである。例えば、(1)従来どおりの欧米的な社会意識や価値観に一定の修正を加え、これを色々な民族を通ずる指導理念として確立し、各民族に理解と同調を求めて行く方法、(2)色々な民族の社会意識や価値観のそれぞれを絶対的なものとして個別に尊重し、国際的には国連その他の機関によるゆるやかな最小限の調整を加えるにとどめる方法、(3)色々な民族の社会意識や価値観を取捨選択調整して中核となる新たな指導理念を構成し、各民族に同様の理解と同調を求めて行く方法などは、その代表的なものである。いずれが優れているか、いずれが現実的であるかなどは、今後の検討課題であろう。いずれにせよ、ロータリーが窮極の目的とする国際理解と平和の問題に対する対応として、今後ロータリーが取り上げて行くべき中心的課題であろうかと思うのである。

(一九九二年六月)

VI

ロータリーをめぐる雑感

二つの説

人の世のあり方の基本については、古来二つの考え方があつたようである。

まず、人生は心であるという説がある。人生における幸福は、人の心によつてのみ得られるとする説である。古今東西多くの優れた人格が繰り返し唱えられたところで、イエス・キリストなどは、その代表的な一人であろう。ただ、この説は、シーザーのものはシーザーのところへと断固言い切ることで分かるように、心の純粹さをどこまでも求め続けて行くところにその基本的な性格があり、私も凡人がなかなかついて行けない厳しさを漂わせているようである。

そこで、私どもの目は、どうしても次の説に向けられてしまうこととなる。その説は、人生とは力であるという説である。人生における幸福は、結局は力によつてしか味わうことはできないとする説である。ここで力とは、権力や財力は

うに及ばず、学歴、家柄、社会的地位、教養、嗜好から智力、体力、気力にいたるまで、社会的に他に優越するに値する一切の力をいうのであろう。この説は、大変分かりやすく、私どもの心身を委ね易い特色があるが、その反面、ややもすると他人の犠牲の上にか成り立たないとか、徐々に持つ者の心を消失させて行くといった、致命的な欠点もあるようである。先年来のいくつかの政治的社会的混乱の渦中の人となった経済人の一人も、いわばこの説に立つてその成果を追求されたかと思われるが、その活動の終焉に際し、「金が俺の心を駄目にした。最初からやり直しだ」との感慨をしみじみと洩らされた由である。

多くの常識人は、この二つの説を適度に自得し、自分の人生という籠の中に、適量の心と適量の力とを雑然と取り入れて、適宜持ち歩いているようである。しかしながら、ロータリーの世界にあつては、それ以上の工夫が必要とされているようである。ロータリアンは、この心と力とを一本の糸でしっかりと結び付けて持ち歩くことを期待されている。そして、その一本の糸こそ、ロータリーをしてロータリーたらしめる奉仕の精神であり、サービスの心掛けではないかと思うの

である。

当節の日本人は、その原因の如何を問わず、ややもすれば心より力の方に傾斜した日々を送りつつあり、しかも、日とともにその傾斜の度を深めつつあるように、それが昨今における我が国の政治社会一般の混乱の主要な原因ではないかと考える。そのような見地から、私どもロータリアンは、今こそロータリーが現実
に果たすべき今日的役割を自覚し、その課題を適確に実行して行くべきではないかと考えるのである。

(一九九〇年七月)

一粒の麦

人は、自らとその周囲の人々を幸せにするために、自らの周囲すなわち社会に対して色々な働きかけをして行くことになるが、このような社会に向けての作業には、大別して二つの手法があるように思われる。

その一は、いわば一般的な手法で、例えば行政的な措置とか政治的な手段によって、画一的に一定の社会的な成果をあげて行こうとするものである。

その二は、いわば個別的な手法で、個々の事案ごとに最善の成果をあげるような個人的な努力を積み重ね、その成果を逐次社会の全般に及ぼして行こうとするものである。

個々の会員と社会の人々との心の結び付きを大切にしながら、まず会員各自の職業活動を正すことから出発して、心的物的な個々の社会問題にかかる奉仕活動

を取り上げ、さらにその広域的展開としての各種の国際奉仕活動を実施することによって、地域社会から国内社会へ、次いで国際社会全般へと、その影響を及ぼして行こうとするロータリーの活動は、正にこの第二の手法の典型といふべきものである。ロータリーのこの手法は、いわば社会に一粒の麦を播き、大切に育てて行こうという手法である。高齢者、障害者、環境、飢餓、疾病、教育、国際理解、ボランティアなどの諸問題にかかる対応などは、地域社会や国際社会へのこのような奉仕活動の具体化の実例であろう。そもそもロータリー自体が、一粒から百十万余粒の、そして一籠から二万六千余籠の麦を立派に育て上げた不滅の歴史的成果である。従つて、一人一人を大切に、また、一つ一つを大切に、心をこめ手をかけて育てて行こうとするロータリーの奉仕活動の真価は、正にこの点にあるといつても過言ではないと思うし、案外事務的な指標を目指す画一的な外形的手法よりも、限らない精神的な活力を秘めつつ人間のあり方に具体的に個性的に鋭く深く迫って行く真実を備えているのではないかと考えるのである。

(一九九〇年八月)

時局放談

四人のロータリアンが議論をしていた。

Aは言った。「どうも日本人は、思想のない人種らしい。人間とは何者であるかを考えることを思想というのだろう。人間は社会的動物だから、人間を考えるということは即社会を考えるということだ。しかし、そのようなことを考えている日本人は大変少ないようだ。せつせと仕事に精を出し、金をため、器用に色々なことをやっているが、そもそも何のためにやっているのかという肝心なところがぼけている」

Bは言った。「全く同感だ。自分は何か思想のようなものを持っていると思っていたが、よく考えてみると何もなかったな。自分は戦中派だが、戦前は皇国史観とか八紘一字など頭一杯につめ込まれ、敗戦でその全部を一挙に取り除かれた

ら、頭の中は実は空っぽで、その後は忙しくて埋める暇などなかったんだな。若い連中はご多分に洩れず思想アレルギーだったし、もちろん国民教育のカリキュラムの中にも思想は入っていなかった。教える方も教わる方も一切触れようとしなかったし、実は触れるべきものを持ち合わせていなかったということだ。日本人に思想がないのは、当然の結末だよ」

Cは言った。「そういえば、日本の教育には、学校教育はもちろん、家庭教育や職能教育や社会教育にも、人間教育という視点や分野が殆どないな。すべてが知能とか能力偏重の技術教育だけだ。文化系であれ理科系であれ、人間自体ではなく、人間を素材として扱うことを目的とする教育は、すべて技術教育というべきだからな」

Dは言った。「大体島国の住民であった我々の先祖は、明治維新どころかもつとずっと以前から、社会の中で周囲への適応だけを考えて人生を生きて行かざるを得なかったんだ。従って、思想など育つ筈がなかったんだよ。現に日本には、本格的に深い思想家、芸術家、政治家などはあまり出ていないし、これらは真の

思想がないと成り立たないものだからな」

Bは言った。「皮肉な話だが、日本には思想がないから、却って表面的な進歩や発展も早いのだな。明治維新の時もそうだったし、戦後経済の驚異的な発展の場合もそうだった。ところが、せっかく富国強兵が実現したり財貨が多量に流入して来ても、基礎となる思想がないから、適切なコントロールもできないし、その成果を本格的に使いこなすこともできない。日本が金儲けは一流でも政治や外交は三流だと言われるのも、故なしとしないね。ところで、思想というのは一朝一夕にできあがるものではないし、無から有は生じないのだから、日本は今後当分見込みはないな」

Aは言った。「大体民主主義というものは、社会の構成員がしっかりと当事者意識を持つところに成立するだろう。当事者意識というのは、自分は何者で他人は何者かということを考え認識するところに成立するのだから、一言で言えば思想のないところに民主主義は成立しないよ。日本なんか民主国家の優等生などといわれているが、本当かな。外見だけで、中身は昔と同じで何も変わっていない

のではないか。外国の連中も最近になってやっとそれに気付いて来て、日本人は何だか変だなどいい出ししているのだろう。日本人は、元来思想を身につける資質を欠いているのではないか」

Dは言った。「そこまでだとは思わない。今までの日本人には、地史的な環境もあつたし、それに物を考える余裕がなかつたんだよ。経済の持つ効用と危険とを実感し、他の国の人達の色々な考え方に接し、政治や社会や経済を自然的条件を加味した地球的環境の中で考えざるを得ない今日の状況に立ち至つたことを自覚して、やっと日本人はそろそろ物を考え出しているのではないかな」

Cは言った。「そういえば、例えばロータリーは、典型的な当事者社会の意識の中で生育したものだ。その中核であるサービスという理念は、当事者としての成果を自己の責任で社会に提供して行こうというところで、日本在来の単なる社会適応の努力とは質的に全く異なるものだから、その真の理解と実践とは、日本の社会に初めて当事者意識を創出して育成して行く重要な契機となつていないか。そして、我々は、そのような視点からすれば、アメリカからロータリー

を直輸入しただけではなく、現在のロータリーの考え方や行動の意義や方向を日本独自の立場から見直して行かなければならない面があるのかも知れない」

Aは言った。「社会主義がよくないと分かったからといって、実は何も解決したことにはなっていない。それ以外の考え方が正しかったことになったわけではない。問題が振り出しに戻っただけだよ。従来のように欧米流に当事者意識で社会を組織し評価し、個人と多数の意見を併せて尊重することを前提とするいわゆる民主的な手法にも相当の誤差や限界があるし、そのような徴表もすでに出て来ていると思う。その辺のところをもっと真剣に考え、対策の検討に着手すべきだ」

こうして、四人は、「日本のロータリアンは、ロータリー自体と日本の社会の実態にもっと突っ込んだ勉強をして、自信を持って適確に考えかつ行動して行くべきである」との点で、おおむね意見が一致した。

(一九九一年一月)

ロータリー妄想

人生の意義は何であろうかという問いかけがしばしば聞かれる。人の知能が粹付けした価値の付加であるから、大変危険な問いかけであるかも知れない。人生なんか愚行の連続だという評もしばしば聞かれるが、これも同じように大変危険な評であるかも知れない。問題の価値を定めるうえで、人の知能に基準としてどれだけの権威があるのか、よく考えてみると結構不分明であるからである。それに、人間は自分の意思でこの世に生まれ出たわけでもないし、また、原則として、自分の意思で死んで行くわけでもない。その中間の生の段階で、生物としての人間に与えられた知能という資質によって、人の行動や世の中の事象に対して漫然とかりそめの価値を安易に付加することに、どれだけの意味があるのだろうか。強いていうならば、個人としてまた社会の一員として、相互の関係の中で生きるべくして生きるということだけに、人が生きることの意味があるのだろうか。

人が人を理解するということも、大変困難な作業である。お互いに理解した積りでも、その程度はさまざまである。当方は相手を理解した積りでも、相手は当方を同様には理解していないこともある。また、どうしても相手の中に理解できないブラック・ホールがあることもある。ブラック・ホールの程度も、さまざまである。極端な場合、どうしても相手を全く理解できない場合もあるであろう。人と人の理解といっても、その内容は、深淺広狭さまざまである。

人が生きることの意味の限界を弁えつつ、人と人との理解の限界を心得て、自然な形で多様で円満な人間関係を形成して行くことに、人の世の幸せがあるのかも知れない。そして、そのような限界を自覚しなかつたり無視したりすることから、人の不幸せが始まるのかも知れない。

このようないわば裸の世界から、「サービスの理念」を始めとするロータリーの精神やその活動を多少離れて眺めて見ることも、木を見ながら森も見たり、少しづつは童心を取り戻したりして、ロータリーの有り難みを理解するうえで随分と役に立つかも知れないと思う。

(一九九二年六月)

人間の顔

自由な競争を原則として許容し、その成果を進歩として率直に受け止め享受して行こうとする体制の社会にあっては、人は、このことに伴って、周囲の人に打ち勝ち優越することに自らが幸せであると感ずるように、ごく自然に導かれて行くのかも知れない。しかしながら、よく考えてみると、世の中が進歩するかどうかということ、何が人の世の幸せであるかということとは、必ずしも一致することではないので、このような考え方は、二つの別異の命題を安易に混淆する錯覚以外の何物でもないことが判明する。無競争が人の心を頹廢させることはいうまでもないが、行き過ぎた競争が人の心を荒廢させるものであつて、しかも競争に節度を求めることが如何に困難であるかは、私どもが日常つぶさに経験するところである。

かつて、人としての幸せを手に入れるために、人間の顔をした社会を求めて資本主義の手法を捨て、社会主義の手法を選んだ人々は、現在に至って、荒廃した物心の残骸と絶望的な社会の状況を背にして、再び資本主義的な手法を思い出してその体制に復帰しようとしているが、彼らが復帰しようとしている社会に果たして人間の顔が存在するかどうか、どのような形で存在するかは、まだ十分に確証されたわけではない。人間の顔は、社会をどのように組織し人間をどのように管理して行くかという考え方や制度や技術にあるのではなく、結局はその社会を構成している人達の心の中にしか存しないからである。

このようなわけで、人は、周囲の人々と手を携え相ともに幸せに生きて行くべきものであり、周囲の人々を無視し或いは傷つけて、自らだけの幸せを求めるところとは許されないものであることを厳に観念しなければ、どのような体制を採用しよう、この世で実は何も得られないものであることに、しかと思いをいたすべきであろう。

（一九九二年一月）

競争の功罪

競争は、進歩と活性化の原動力といわれて来た。しかしながら、この考え方は、現状においてはすでに殆ど破綻に瀕している。フランス革命の人権宣言以来、個人の自由な意思に基づく競争こそは、社会の進歩や活性化とその結果としての人類の福祉の実現を最大限に保障するものであると信じられ、多年に亘り多大の資本主義的努力が傾注された。ところが、公正な競争ですら、個人の能力差と個性差による著しい個人格差を招来するものであるのに、当然の成り行きとして、これにいわゆる不公正な競争が加わった。その結果、競争は人を幸せにするどころか、悪貨は良貨を駆逐するとの諺どおり、社会生活における各種各様の不公正な状況が目に見えぬものとなってしまった。

そこで、いわゆる人間の顔をした社会を求めた一部世界の人々は、思い切つて

社会主義の手法を考案して、実行した。その結果は、不幸にも人間の顔とはほど遠く、救い難いまでに停滞し不活性化した低次元の沈鬱な社会に身を置いただけであった。人々は多大の犠牲を払ったあと、漸くその誤りに気付いてこの手法を放棄し、再び資本主義的な社会に復帰しようとしている。

ところが、資本主義の社会にあっても、人間の顔の実現の課題は期待にほど遠く、人々は外面的な糊塗策を必要のつど局部的に講じることにより、辛うじて現実の辻褄合わせをしている現状にある。そして、競争の美名のもとに、人の心を荒廃させる或いは人の心が荒廃した結果としての色々な不公正で悲惨な社会現象が世界的に公然と横行し、改善の見込みは殆ど立っていない。例えば、果てしない有害な競争行動の放置、物質とその本来の利用価値よりは単なる交換価値を偏重する価値観の横行、無定見で食欲なシェア拡大の志向とこれに伴う過大な消費需要の作出やその結果たる膨大な資源の濫費などの本来の弊害は、殆ど旧態依然のままであるどころか、むしろ拡大の傾向にある。当節急速に深刻化して来た地球環境問題も、その根本的原因の多くは、社会的価値観の欠如と過度の無意味

な競争の弊害に行きつくといっても、過言ではないであろう。

このようにして、「競争は進歩と活性化の原動力」というテーマは、現代においては、殆どこれを否定する方向で検討の対象とされなければならない。進歩や活性化は競争の数多い結果の一つに過ぎないもので、よく考えれば、競争と進歩や活性化との間には、何らの必然的關係はない。それに、競争というものは、他人の犠牲とか人の心の価値の無視や否定の上に成り立つという本質を持つものであり、一定の限度に競争を自制するとか、不公正な競争を自制して公正なルールを守ることを競争者に求めることが如何に困難であり、むしろ本来殆ど不可能に近いことは、日常私どもがつぶさに体験するところである。従って、競争の弊害は、競争を否定してこれに代えて外的に完全な社会管理を行おうとする社会主義などの外的手法では、全く解決できないし、資本主義の修正的な手法に見られるように、競争を是認しつつこれに外的な制約を加えるという妥協的な手法だけに よっても、遂に解決できないものである。このことは、すでに歴史的に実証済みであるだけでなく、競争の本来的性格からも当然に導かれる結論でもある。進歩

や活性化の課題は、外的な修正手法が提示する制約をやむをえないものとして是認しつつ、少しでも多くの人々が、その心の内部からこれらの制約を人間の存在にとって本質的なものとして真に肯定して、これらに積極的な精神的支えを育てて行く以外に、解決の方法はないのではなからうか。

このようなわけで、私どもは、資本主義の修正手法に不可避な競争の外的制約を心の内から支えるべき精神的価値の理解と実現に、より多くの工夫と努力を重ねなければならぬこととなる。そして、その基本的な立場は、「人の幸せは、社会の一人一人が、お互いに人間として大切にしようこと」によってしか実現することができないものである」ことを、一人でも多くの人々が心底から痛切に自覚すること以外には、ありえないと思うのである。もちろん、古来このような目標が達成されたことはなく、実現への努力が過去において成功した事例はないであろう。しかしながら、時代はすでに、グローバルな社会環境や全般的な科学的条件とこれらを含む物心両面に亘る地球環境全体の総合的評価によって行動しなければ、殆どの問題が解決しない時期に立ち至って来ており、これ以上の遅疑逡巡

は許されない状況にあると思われる。ロータリーは、すでに「サービスの理念」の下に人の社会性の適切な実現をその窮極の目的として努力を重ねて来たものであるから、これらの問題を避けることなくさらに引き続き正面から取り上げて検討をすすめる、その成果を世界の人々に提示して、その実現に努めて行く現代的責務を負っていると考えるのである。

(一九九一年一月)

生きるための三つの視点

私どもは、この世に生きて行くための心構えについては、古来幾多の先達から教えられて来た。或いは個人的な見地なり社会的な見地から、或いは倫理的な見地なり経済的な見地から、或いは哲学的な見地なり宗教的な見地から、その他さまざまな見地から、多様な意見が私どもに寄せられて来た。そして、そのいずれもが、相応の理由と真理を含んでいることは否定できない。しかしながら、私どもが生活する現在の社会においては、その内容や規模が全世界に拡大し、さらに科学的な手法による物心の相互関与が増大して甚だしい変質を招来し、とどまるどころを知らない。そこで、これらへの対応をはかるための私どもの心構えについては、新たな視点から検討を加えてみる必要に迫られているのではないかと思われる。このような見地から、とりあえず三つの論点を取り上げてみたいと思う。

まず、私どもは、京都精華大学の桜田劭氏も述べておられるように、地球と共

に共存して行かなければならない。人間を含む動植物などの有機物はもちろんのこと、水、空気、土壌などの無機物とも共存し共に生きて行く心構えで生きて行かなければならない。何故ならば、人間もまた地球上の単なる一存在物に過ぎないからである。人間は知能という特異な資質を賦与されているが、そのことをよいこととして、その知能を誤用したり濫用したり、場合によっては悪用したりして、地球上で余りにも勝手なことをし過ぎて来ているのではなからうか。人間は、地球が人間のためにだけ存在していると思ひ込むという錯覚に陥っているのではなからうか。人間は、自己の知能の一部を過度に拡大して、科学技術の底知れない開発とその成果である感覚的な快適社会の追求に没頭するとともに、爆発的な人口増加とその直接間接の結果である地球の汚染を放置して来ているが、このような行為は、いわば「人間エゴ」といふべきものであって、今後はもはや許されないのではなからうか。人間自体相互の間においても同様で、すべての人間が共存し共に生きて行く心構えで生きて行くことが必要であらう。自分や自分が属する集団だけの利益だけを追求し、他は単なる材料や手段としてしか意識しないと

いった一方的な見解は、もはや許されないであろう。従って、これを支える政治経済上のいわゆる大国主義やセクト主義は、厳に慎まなければならないこととなる。国家、民族、種族など各種の区分や偏見は、私どもの意識や現実の行動から、可能な限り排除して行かなければならない。個人間の人間関係においても、老若や男女の別、学歴教養の程度、資産保有の多寡、心身障害の有無、職業の種別その他の生存の条件や内容の如何を問わず、すべての者がそれぞれの立場において共存し共に生きて行く心構えで生きることが求められることとなる。

次に、私どもは、どのような場合でも、自他相互の精神の自由を可能な限り尊重して生きて行かなければならない。人間は、等しく精神的な存在であるからである。このことは、現代の社会にあつては当然のことであり、むしろ常識といつてもよいことである。しかしながら、現在の私どもに、常識である筈のこのような精神の自由が果たして十分に保有されているであろうか。表面や形式だけの精神の自由はともかく、実質上の精神の自由が私どもに与えられているかどうかは、甚だ疑問である。私どもが生活する社会とその管理運営の組織や手段が余りにも

肥大化し画一化し専門化し、合理化され拡大されたために、私どもの真の精神の自由は、制約され歪められ軽視され、他の価値と置き換えられ、極端な場面では圧殺され消失してしまっているのではなからうか。しかも、私どもはそのことに気が付かず、引き続き精神の自由を十分に保有し享受しているとの錯覚に陥っているのではなからうか。私どもは、精神の自由が私どもの幸せの絶対の前提であることの意義を再認識し、真に社会性の確保に必要な制約を除き、自他の精神的自由を相互に実質的に尊重することを強く求めつつ生きて行かなければならない。

さらに、私どもは、自分が生きて行くために必要な物質を自分の責任で調達し入手しなければならず、その限りで正しい競争に努めなければならぬが、それ以上の不必要な財貨を追い求めて無制約な競争を続けることは、これを差し控えるよう努めなければならぬ。何故ならば、自分が生きるために必要な物質を自分で調達できなければ、他方本願で他人に迷惑をかけることになる。また、自分が生きて行くために不必要な財貨を追い求めることは、人間に与えられた最大の財産が時間と健康であることに気が付かず、無意識のうちにこれらが無駄に浪費

し、自分の幸せのために無意味であるどころか有害であるし、その過程で非人間的な手法などで他人を傷つけ、さらには結果的に他人が幸せに生きて行くために必要な物質を奪い去って独占することになるからである。競争は本能であり、人間社会活性化の活力の根源であるから、その完全な否定は明らかに誤りである。だからといって、競争を目先の必要だけでかつその場限りで安易に外から部分的に制約することは、別の弊害を発生させるだけで、何の効果もない。競争の弊害の解消に努めつつこれを社会の活性化に正しく生かして行くためには、私どもが確たる心の拠りどころを持って弟争を内心から自発的に制約するように努める以外に、方法はないと思うのである。

以上の論点は、いずれも余りにも現実離れしているだけでなく、相互に矛盾する面もあって、却って問題を複雑にしているかも知れない。しかしながら、私どもが当面しているこの限りなく激動して行く時代に対処するためには、何らかの正しい価値観を模索し、新たな視点からの心構えを自得するよう努めなければならぬと思うのである。

(一九九一年二月)

生きることの意味

人間には、幸か不幸か、知能という特異な資質が与えられている。これが、すべての問題の始まりである。この知能は、正しく使えば、人間に限りない福祉をもたらしてくれるが、誤用したり濫用したり悪用したりすると、数多くの災厄や損失を人間にもたらす。近代の人間社会は、この知能の誤用や濫用や悪用と、その結果である災厄や損失への対応の時代であったといっても過言ではないかも知れない。

周知のように、例えば、この近代社会では、科学技術と社会管理手法の開発が、とめどもなく進行した。それは、人間に与えられた色々な資質のうちの知能の部分、特に科学的資質と人間社会の集団管理技術の開発を主とするもので、快適な生活を実感的に追求する人間の本能と直結して、とどまるところなく進行を深め

た。しかしながら、その結果、人間は、二つの根本的な錯覚と一つの基本的な誤解に陥った。まず、地球は人間のためにだけ存在していると思ひ込むという錯覚である。次に、その延長線上で、他人は自分のためにだけ存在していると思ひ込むという錯覚である。最後に、生活の快適度の感覺的進行を進歩と受け止める誤解である。これらに伴つて人間が自ら招いた災厄と損失は、まず数々の地域的なそして地球規模における環境障害ないしは環境破壊という人為的災害であつた。また、これらに伴つて人間が自ら招いた次の災厄と損失は、資本の論理に任せた無制約な社会的活動に伴う人間的な障害ないしは人間としての価値の否定という社会的災害であつた。前者は、今日、私どもが正に環境問題として当面している課題である。後者については、対応策として一部の人間が社会主義の手法という試験的プログラムの断行に踏み切つたが、人間のあり方にかかる基本的な試行錯誤として、当然の結末として歴史的に消え去る状況にある。そして、私どもは今、やむなく採用している数多くの修正主義の手法について、好むと好まざるとに拘らず、その当否とあり方に根本的な検討を加えなければならぬ時代に入つて来

ているのである。

私どもは今、人間とは何であるかを真剣に問い直してみる必要に迫られている。人間は社会的動物であるから、人間を考えることは、即社会を考えることである。

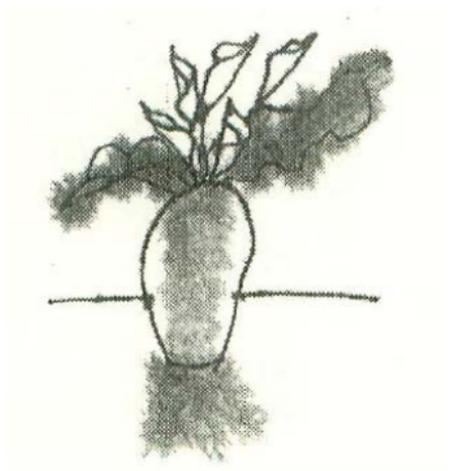
私どもは、この作業とその成果に「思想」の名を冠さなければならぬ。私どもは、人間がこの地球上に存在を許されたささやかな一個の存在であり、互いに地球上の他の物と等しい存在物に過ぎないという大前提に立って、多くの人が思想を持ち、何が人間にとって価値があるのかという正しい価値観を確立して行かなければならない。そして、そのことが私ども人間に与えられた知能を正しく活用し、これを人間相互の福祉の実現に役立てて行く所以である。地球上にあるものは人間だけであることを前提とした意見は、もはや無意味であるどころか、却って有害である。私どもが今必要としている思想は、例えば近年特にその誤用や濫用や悪用によって被害を拡散させる危険があるとされる科学的資質や社会管理の手法のあり方への深い自省を通じ、其の進歩とは何であるかを考え、人間の幸せな生存を守るために人間が自己の知能に課すべき自己制約を定めようとするもの

でなければならぬ。私どもは、人と物、人と地球の關係に思いをいたし、生産と消費の關係とそのあり方や価値を考え、人と地球の共存の視點に立つて環境を考え、現在のいわゆる環境対策を單なる対症療法に終わらせないように努めなければならぬ。人の団体的存在のあり方においても、例えば国家、民族、種族、地域社会、職業社会その他の部分社会が、自己圏の利益のみに執着してその偏重をはかり、いわゆる大国主義やセクト主義に陥ることを排し、それぞれの立場において共に生きることを求めるものであるし、また、人の個人的關係においても、すべての人が、男女の別、資質や職業や年齢世代の相違、資産の多寡、障害の有無その他個体の状況の如何を問わず、それぞれの立場において自他を尊重しつつ共に生きて行くことを求めるものであつて、人間社会のあり方の今日的検討を單なる目先の対症療法に終わらせないものでなければならぬ。

ロータリーは、人間とその社会のあり方を考え、他者への配慮と、人の心のやさしさや豊かさに最高の価値を置き、自己の職業のあり方を正すことから出発して、人間社会に役立つことを考え、検討し、企画して、その実行を地域社会から

国際社会へと推進しようとする職業人の集いである。従って、私どもロータリアンは、以上のような基本的視点から人間が生きる意味を改めて問い直し、人間社会の福祉の実現に役立てるよう努めて行くべきであろう。

(一九九一年二月)



現今の世界が当面する二つの課題

社会において人間をどの程度に外面から管理するかという考え方については、これを大きく二つに区分することが、以前は支配的であった。自由は精神的存在としての人間の象徴であり、可及的にこれを尊重し実効あらしめるべきであるとする見解と、自由の中にひそむ恣意こそは人間が陥り易い悪しき素因であり、可及的にこれを制圧し除去すべきであるとする見解である。そして、その各々を代表するとする二つの政治、経済体制の対立構造を前提とする一応の外形的秩序の枠の中で、最近に至るまで、人間社会の運営管理がマクロに遂行されて来た。それぞれの修正的形態を含む自由主義や資本主義の体制と社会主義や共産主義の体制である。そして、後者は、ソ連や中国などの現実の実態が果たして額面どおりであるかどうかには相応の疑問を残しつつ、結局は、人間精神の自由の否定ないし

は否定に等しい制約という犠牲と引き換えに新たな社会的秩序を案出するという
壮大な歴史的实验としての性格を一応帶有するものとされたが、必然的な経過と
して、近時漸くその終熄を迎えた。その結果として、世界の殆どの体制が、お
おむね修正的な形態を含む自由主義と資本主義を基調とすることとなったのである。
ただ、現今におけるこのような修正主義的な社会が、以前のそれに比して、相当
に異質なものとなっていることは、否定できない。まず、色々な社会が、民族、
地域、歴史、宗教その他さまざまの要因により、極めて多様な形態をとっており、
決して単一なものではないことである。次に、修正の手法も、ややもすれば対症
療法としての外面的な安易な手法に陥り易いのであるが、そのような手法にはど
うやら致命的な限界があつて、それだけでは決して本質的解決とはならないら
しいという実感なり省察を伴っていることである。また、修正のあり方自体が、科
学技術の異常な開発を核とする生産、流通、消費など社会的活動の著しい変貌や、
社会意識とか価値観の混迷などへの対応を克服するものでなければならぬとい
う使命を新たに負担していることである。最後に、世界中が殆どいわば一つの多

民族国家に等しい状況に帰着して来ていることの結果として、世界の人々が、既存の色々な枠組みを超えて、より自発的な協調的な多角的な精神的な努力で相互に秩序を維持して行かなければならないこととなつて来ているという組織処理上の問題が、必然的に付着して来ているということである。

このような諸問題を抱えた現今の世界において、私どもが当面している課題は数多くあるが、その主要なものが三つばかりあるかと思う。

第一は、知能の処理という課題である。人間は、幸か不幸か知能という独特の資質を賦与されている。私どもは、この知能は個人的資質であつてその開発は当該個人に限りない豊かさや幸せをもたらすもので、その無制約な活用が人格の一部として個人に完全に保証されていると、何らの疑いもなく考えている。その社会的資質としての側面に思いをいたさないのはもちろんのこと、その社会的効用は個人的努力の単なる反射的成果に過ぎないと考えている。しかし、果たしてそうであろうか。知能は、これを正しく使えば、私どもに限りない利益や幸せをもたらすが、これを誤用し濫用し悪用すると、私どもに限りない災厄や損失をもた

らす。近代の人間社会は、知能の誤用や濫用や悪用がもたらした災厄や損失への対応の時代であったといっても、過言ではない。今や、個人の意識や価値観の混乱、外面的な社会管理のマクロな進行、底知れない科学技術の開発と、これらに伴う利益と災厄を前にして、私どもは、人間にとって知能とは何であるか、知能を人間社会の幸せのために正しく生かして行くために、私どもはその取り扱いはどのような考え方と工夫をすべきであるかについて、あらためてすみやかな省察を始めるべき時期に來ているのではないであろうか。

第二は、競争本能のコントロールという古来未解決のままの課題である。競争は、生物本能の一つとして、私どもが否定し去ることのできない資質の一つである。この競争という本能も、正しく生かせば、人間社会を活性化し、新たな価値を生み出し、人間の幸せに資するのであるが、これを誤用し濫用し悪用すれば、はかり知れない害悪を私どもにもたらすであろう。例えば、公正な競争ですら、能力差や個性差を個人差として社会に定着させてしまうのに、これにいわゆる不公正な競争が不可避的に参入して、被害を受忍の限度を超えて拡大する。現実の

問題として、現今の我が国における堪え難い競争体質の学歴教育や職業生活の弊害はいうに及ばず、社会の各界各面に続発する幾多の不祥事や、潜在する各種の不正要因などについては、あらためて論じる必要もない。この現実を直視し、いわゆる人間の顔をした社会を私どもの手に取り戻すことを意図した一部の人達によつてかつて発想され実行された社会主義の手法が、その自然に反し非合理的である故で必然的経過を経て終楓に至つたことは、吾人の記憶に新しいところである。しかしながら、私どもは、ただいまの修正主義的な手法においても、何らかの形でこの競争という不可避の本能を制約すべきであるとする点については、意見が一致している。ただ、そのコントロールの手法は、ただいままでのところ、依然として外的なものにとどまっているようである。例えば、実際上有効なものとして行われている制約の殆どは、業界における団体的な制約とか、行政的対応の段階における制約とか、法的規制を背景とした制約などであり、これらはすべてが外的な域内の手法である。しかし、外的なものにとどまっている限り、制約の効果は対療法的なもので、単に問題を他に移すだけであり、次々と新しくよ

り困難な問題を触発してとどまるところがなく、何ら根本的な解決とはならない。競争を本質的に制約するためには、競争を内的に制約する精神的な成果の構築こそが唯一の解決手段であり、そのための努力が、私どもに与えられた現今の切実な課題ではないであろうか。

第三は、社会における自己責任の自覚という課題である。一つの考え方によると、「私どもにとって、社会は私どもとは別に以前から存在する域体である。私どもが社会に多少の貢献をしようがまた社会から多少の収奪をしようが、大した影響もない。私どもは、社会の中にあつてひたすら社会に適應して生きて行くことが自他の共存を保証する倫理であり、個人としての幸せを確かめる所以である。何らかの社会的な問題が発生しても、それは関係当事者だけの責任に属する問題であつて、自分自身とは何の関係もない」とする。しかし、果たしてそうであるか。もう一つの別の考え方がある。「社会は私どもがお互いに生きて行くために構成した組織であり、私どもはその当事者である。私どもは、社会の当事者として、社会を活用する權益を保有すると同時に、その維持管理と発展のための責

務を負担している。何らかの社会的な問題が発生すれば、その問題が当該社会の当事者としての自分とどのような関連があるかに直ちに思いをいたし、対応について適切な意見を持ち、必要と考えた場合には相応の措置をとるよう努めねばならない」とする。そして、どうやら、後者の考えの方が、人間と社会の存在意義から見て、正しい見解とされるようである。ただ、私どもには、どうも後者の考え方の自覚が必ずしも十分ではないようである。このような自覚を真に高めて行くことが、私どもに課せられた現今の基本的課題の一つではないであろうか。

このような三つの課題は、現今の世界において、私どもが、人間と社会のあり方を考え、人間社会の妥当な組織と秩序を案出し、新しい社会意識と価値観を手に入れ、個人の幸せとこれを保証するよりよい社会の実現に努めるうえで、避けて通れない基本的な論点であろうと思う。そして、このように考えて来ると、「サービスの理念」を中核とするロータリーの思想は、正に今日の時代を予見し、必要な理念上の準備を相当程度すでに先見していたことに思い至るのである。

(一九九二年二月)

人間の資質とサービスの理念

人間の資質、例えば知能とか情緒とか体力とかいったものには、本来は個人に属する側面と社会資源としての側面の両面があると思われる。そして、ややもすれば、後者の側面が見落とされ勝ちであるように思われる。

発展途上の社会では、社会全般の進歩と福祉を実現しようとするために、後者の側面が明確に認識され、人間の資質の教育と開発が、社会全般で取り上げべき問題として、意図的に計画的に色々な形で色々な部門で強調され、推進され、相応の成果をあげて来た。

ところが、社会が豊かとなり、先進的な性格のものとなって来るに従って、後者の側面が軽視され無視されて遂には欠落し、人間の資質は個人生来の属性と資質というべきもので、その開発と成果の享受は個人の恣意的な処理に委ねられ、

その効果の社会への波及は、個人的活動の単なる間接の結果に過ぎないという考え方が、いわば当然のこととして、何らの疑いもなく受け入れられることとなる。そこで、人々は、あらゆる犠牲を払ってまでも、自分や自分の子弟の知能その他の資質の開発に狂奔し、学校教育も職業生活も、対症的で表面的で画一的な競争と管理の下に終始し、真の社会的適応は全く意識の埒外に置かれることとなる。そのような社会にあつては、本来は個人と社会の幸せをもたらす筈であつた人間の資質は、何らその効用を果たすことなく、却つて有害な因子として作用することとなる。

ところで、社会の開発のために人間の資質を社会資源として活用するということは、極めて分かり易い単純で実用的な考え方であろうが、決して正しい考え方ではないであろう。何故ならば、人間の資質に社会資源としての側面があるかどうかの問題は、単にその効用を見る功利的な視点だけでなく、もっと根本的に人間の存在をどう見るのか、避けて通れずまた否定することのできない人間の社会性をどう理解するのかにかかっている議論であるからである。そして、私どもの

社会の内容がどのようなものであるかとは関係なく、むしろ私どもの社会が先進的な性格なものとなればなるほど、人間の資質の社会資源としての性格は強調され、その成果が社会に反映し生かされるように努めて行かなければならないのではないかと思われる。

ロータリーが人間社会不変の真理として掲げる「サービスの理念」自体は、もつと一般的な人間の社会性に基づく社会的責務を自覚してその実行を志向することを意味するものであろうが、その有力な要素として、人間の資質の社会資源としての性格を自覚して社会への寄与に努力するという視点があるのではないかと考えるのである。

(一九九二年六月)

企業活動とロータリー

ロータリー・クラブの会員には個人が予定され、ロータリーの基本観念であるサービスの理念 **Ideal of Service** は基本的に個人としてのロータリアンに期待され、この理念に基づく各種のサービス活動も原則として個人及び集団としてのロータリアン自体に期待されていることは、周知のとおりである。そして、企業活動におけるロータリーの理想の実現は、もっぱらロータリアンである企業の代表者や役員などの人々の個人としての努力に負うものとされているが、企業は資本の論理を組織の原理として市場システムによった営利性確保の厳しい要求にさらされているために、ややもすれば十分な成果をあげられず、場合によっては全く効果が期待できないなどの現状にあるものようである。

しかしながら、企業を始めとする公私の団体の活動は、等しく社会的な活動として、個人の社会的活動と何ら異なるものではない。むしろ、人間の社会におけ

る職業活動その他の社会的活動は、元來はすべて個人の活動であつたが、社会經濟の充實と近代化に伴い、企業活動がこれから分化し發展を遂げて来たものである。従つて、両者は社会的には一体としての評価を与えられるべきものと考えられるから、個人としてのロータリアンがサービスの理念により醇化された社会的存在となり、ロータリーによつて期待されるサービス活動に努力を傾注しても、關係企業がこれと無縁の存在としてひたすら營利を追求してやまない組織的な活動に終始する域を出ないという状況が改善されなければ、ロータリーの社会への影響も極めて限定され無力なものに歸する憾みなしとしない。

科学を伴つた經濟的諸成果の巨大化は、企業の組織的活動による社会の實質支配を日一日と進めつつあるかと思われるが、私どもは、このような今日の現實を直視しながら、競争という手段や營利という指標のもつ意義と限界の再検討に議論を深めつつ、ロータリーの精神的な成果がより有効に企業活動の中に機能して行くように、現在の事態に即した新たな工夫と努力を重ねて參らなければならぬと思ふのである。

(一九九三年二月)

世情雑感

いわゆるバブル経済の崩壊に伴い土地神話も一応解消した態となっているとはいいながら、我が国の地価、なかならず経済活動の拠点である都市部とその周辺地域のそれは、諸外国に比して依然高い水準にある。

元来、我が国のように狭い国土で高度な経済活動が活発に継続して展開されれば、市場経済の原理によるかぎり、土地自体が恰好の投機的な取引の対象となり、地価の高騰を招くことは自明の理であったのであるから、戦後我が国の経済発展と並行して、否むしろ先行して、確固たる先見的な土地政策が論議され策定されるべきであつたにも拘らず現実にはこれを欠き、しかも現時に至るもなお本格的な施策の策定とその実施を見ることができていないことは、私どもにとつてまことに不幸な事態であつたというほかはない。もちろん、先般来遅まきながら、国

土地利用計画法の施行など行政による地価の管理や、金融政策、土地税制などによる地価の抑制などの施策が講じられているが、いずれも対症的な弥縫策に過ぎず、殆ど効果がないか、仮に効果があったとしても、却つて他の分野により強烈な副作用を与えることによつて、より大きな苦しみを国民に与えることが懸念される。現に過去において、行政による物価の統制が正常な経済活動を維持しながら奏功した先例は見当たらないし、定見に基づかないその場限りの金利や貸出の規制その他の金融政策とか土地税制などの模索的实施が正常な企業活動を阻害し、内部要因の複合による前例のない新型の構造不況と評される現時の全般的な不況にみられるように、経済の根幹を揺るがす重大な結果を招く事態を惹き起こしていることも、私どもがすでに痛いほど実感しつつあるところである。さらに、このような不況に対する景気対策として、巨額な公共投資や公共工事の前倒し発注とか、場合によつては公的資金の投入までを予定する不良担保不動産の買い上げなどを実施しても、結局は当座の対症的な応急策の域を出ず、何ら間厩の根本的解決とはならないことを銘記すべきであらう。

ちなみに、市場経済の原理を基本として経済の運営がはかられている我が国において、地価の抑制や引き下げは、土地の豊富な供給によって解決をはかる以外に根本的な方法がありえないことは、極めて単純な自明の理である。例えば、東京や大阪などの大都市周辺においても、五〇キロメートルないし一〇〇キロメートルの圏内ではまだまだ広域の土地が安価に存在しているのであるから、これらの複数箇所を大規模に先行取得して、バス輸送を予定した余裕のある造成を行い、都心部に新設する地下駅に通勤新幹線を地下方式で導入して、既存地下鉄との立体的な連絡をはかれば、一時間以内の通勤が可能で良好な環境の住宅地が、安価で多量に供給できるであろう。また、海面における直接建設の技法を開発すれば、都心部における事業用中高層建物が、導入道路ともども比較的低コストで多量に供給可能となるであろう。こうして、我が国の高度の建設技術と豊富な資金の活用を前提とすれば、住宅地や事業用建物の潤沢な供給を確保する方途は、狭い我が国にあっても、技術的にもまた社会的にも十分に可能であるということができるのである。

ところで、このように高い地価が我が国経済の発展の障害になっていると指摘されて久しい。ただ問題は、その指摘が、依然として単なる計量上の域にとどまっている点にある。仔細な観察を加えるならば、障害は、量的な域にとどまらず、さらに深く質的な領域にまで及んでいる。すなわち、このように高い地価は、我が国の企業活動の遂行や管理にかかる関係者の意識に決定的な影響を及ぼしているし、ひいては、私ども国民一般の社会意識自体にも本質的ともいふべき影響を及ぼしているのではないかと思われるのである。何故ならば、そもそも土地建物の利用は、企業活動を始めとする私どもの社会活動一般はもちろん、私どもの生存自体の基礎である。従って、地価が高ければ、これらの利用に必要な所有権や利用権の取得とその資金の調達にかかる対価も高くなるし、ひいては原材料の調達、生産、流通やこれらに関連する諸問題の処理にかかる対価その他の諸費用も高くなり、結局は活動全般に伴う一般経費のかさ上げを招くこととなる。そして、このような不利な客観的条件の下では、例えば経済的な側面だけを取り上げてみても、我が国の企業は、尋常の努力では、諸外国の企業との競争に勝てないこと

となるであろう。そこで、実務的な適応に敏感な我が国の企業は、諸外国との競争条件の対等化をはかるため、無意識のうちにいわゆる日本的経営方式と称せられる数々の独自の対策を案出して、その実現のための努力を重ねることとなった。

例えば、適応性に富んだ我が国民の資質を最大限に活用して、固有の勤勉さを異常なまでに高める個人的努力を国民に要請し、その実効性を確保している。学歴偏重、終身雇用、年功序列など独特のキャリア・システムの工夫を案出して、社会に定着させた。株式の配当性向を著しく過少に抑制して、利益の内部留保の確保に徹して来た。土地や株式の含み益を異常なまでに蓄積し、これらを見合いに資金の安易な転換と調達をはかって来た。実質上の利益の確保よりは売上高のかさ上げとシェアの拡大を志向し、大量生産と大量販売に企業努力の大半を傾注し、その実現をはかるために果てしない価格競争やローンの多用で必要を超えた過度の消費需要を作出し、経済活動の量の外見上の拡大を実現することによって、体質の外形的な強化に努めて来た。さらに、労使の円満解決を目指した粘り強い協調、各面各分野に亘る融通無碍な行政指導、取引の排他的な系列化、企業活動

の業界主導による談合などの各種調整的な社会的慣行を定型化させ定着させて来ている。これらはいずれも、活動の極度の効率化をはかり、非生産的な社会的摩擦を極力回避することが、我が国の経済社会の効果的運営に絶対に必要であるとの本能的な自覚に基づくものであろう。そして、さらに企業は、このようにして手に入れた経営上の特質と能力とを国内市場における活動にも均しく適用し、比類のない競争体質の確立に資して来た。かくて私どもは、このようにして私どもが追い求め手に入れて来た数々の社会的な成果が、企業的な活動を始めとする私どもの社会的活動の現実がどのようなものでありまた本来どのようなものであるべきかという問題の基本的な認識と理解に、色濃い影を落としていることに気付くのである。しかも、このことは、私どものいわゆる東洋的資質が先進的な欧米的資質と相異するという人種的特性の相違に基づく問題とは、殆ど関係がない。従つて、私どもの右のような適応の現状が私どもの固有の資質に起因するとの前提のもとに、私どもの意識が世界の人々の一般的な意識と本来的に相達する異質なものであると論じ、これを是正する以外に私どもが世界に適応することは困難

であるとする意見は、傾聴すべき幾多の貴重な論点を含むとはいいながら、結論において、本来形而下的な検討と処理を先行すべき問題を、単なる気質上のいわば形而上的な領域内で取り上げて結論しようとする危険な誤りを犯そうとしている危惧なしとしないと考えるものである。

ところで、我が国の経済は、土地政策不在に起因するバブル経済を前提とした安易な膨張志向を基調として、すでに長年に亘り運営が重ねられ、その実績がむしろ体質化する様相を呈して来た。そして、物質の無秩序な氾濫を原因として物の心の不均衡が進行し、その結果、異常な政治的社会的事象が続発する一方、肝腎せつかくの企業の努力自体も却って殆ど利益を生まない不毛のものとなり、総じて、荒廃した人の心と、傷つけられ破壊された社会とその環境がところどころに現出することとなった。そして、その弊害が漸く顕著となるや、事態の真因とは何ら本質的に関与しない前述のような場当たりのは正策が慌ただしく講じられ、その結果、私どもは、ただいまのところ、不動産、証券、金融その他経済の全般に亘り、かつてない深刻で出口が見当たらない構造的な混乱の渦中に身を置くこ

とを余儀なくされている。そして漸く、私どもは、我が国經濟の全般的體質を本来あるべき姿に根本的に是正するためには、今日のような仮装的狀況に立ち至つた真因を直視しつつ、よほど慎重かつ綿密で計画的かつ抜本的な対策や措置が確たる長期的な視点で策定され粘り強く実施されること以外に、方途はないことに氣付き始めているのである。

このようなわけで、我が国の地価問題は、私ども我が国のロータリアンが、競争という人間の存在自体に内在する困難な課題を克服し、さらに当画する数々の社会的条件を解決しつつ、私ども自身を始め社会の人々の幸福を保證するための社会意識の今後のあり方を模索して行くうえで、すべての問題の原点として、避けて通れない重要な要素としての性格を持つ問題であることを指摘せざるをえないと考えるのである。

(一九九二年八月)

経営の危険要因の増加と企業の社会的課題

戦後における我が国の経済は、資本主義と社会主義及びその各修正形態の二極対立を基本とした国際的な政治、経済の枠組みを前提として、与党政権が安定して継続し行政が有効に機能する中で、企業自体が案出したいわゆる日本の経営方式を活用することによって、数度に亘る不況を克服して、継続的な高度成長を遂げて来た。ところが、近時いわゆるバブル経済の破綻とともに、このような景況は急激に失われ、企業は自らの内外にその存在意義を問い直すべき幾多の社会的な課題を課せられていることがかねて指摘されて来ているほか、さらに不安定な危険な要因を帯有する事態に当面していることが判明し、私どもは、これらの事態に対しても、早急に適確な対応をはかることを迫られて来ている。

このような事態を招いた根本的な原因は、世界がすでに一つの巨大な多民族国

家ないしは地域社会と化していることを前提として、いくつかの側面から指摘することができるであろう。

まず第一は、社会主義体制の崩壊に伴い冷戦構造という力の均衡を前提とした秩序が消滅し、ヨーロッパにおける統一ドイツの出現や中東における湾岸戦争の勃発と終熄を始めとして、各地で国家権力の再構築や民族独立その他の地域紛争とこれらに関連する諸問題が続発しつつあることなどの主として政治的な性格のものであろう。

第二は、アメリカの景気が慢性的に後退し、国際的な貿易摩擦が発生して貿易の管理化が論じられ、ECの市場統合や経済のブロック化が企てられて、市場経済原理の修正的手法や新しい経済秩序への模索などが試みられているという主として経済的な性格のものであろう。

第三は、人間中心と個人中心の意識と価値観に基づいて科学技術と社会管理手法の開発を進めることにより快適社会の実現をひたすら追求してやまない欧米的資質が、世界的に無制約の拡大深化を進めつつあること、そしてその破綻に伴い、

開発と環境の調整をめぐる国際的紛議、意識の個別化と分裂を原質とする新たな各種の社会的な諸問題、地域及び地球規模での深刻な環境問題などが発生し、それらへの根本的な批判と対応の努力が試みられているという主として文化的な社会的な性格のものであろう。

第四は、戦後における我が国経済の発展に先行すべきであった土地政策が欠落していたために、慢性的で異常な地価の高騰を招いたこと、これを克服して競争力を確保するために、消極的には、学歴偏重、終身雇用、年功序列などの硬直した人事体制を発案して固着させ、株式の配当性を抑制して資金の内部留像に努め、労使及び業界の談合や取引の系列化に重きを置くとか広汎な行政指導を受忍するなど社会的摩擦を回避して活動の効率化に努めるとともに、積極的には、土地や株式の含み益を安易に資金転換して増益よりはシェア拡大を志向するなど、いわゆる日本の経営方式を工夫して定着させたこと、その成果であった裏画的な高度成長に伴う種々の政治的、経済的、社会的な歪みが一挙に顕在化し、その批判と是正への努力をはかりつつ、国際社会への適応に努めなければならないこと

となつてゐるといふ主として我が国特有の性格のものであらう。

このような経営上の危険の要因となる事態について、冗長を顧みず若干の付言を試みると、世上これを国家的レベルの危機(Crisis)と企業レベルの危険(Risk)に区分するとか、自己の意思にかかわる投機的なものと自然的社会的要因による本来的なものに区分するとか、動態的なものと静態的なものに区分するなどの論議がされてゐるが、必要なことはそのような区分ではなく、現実に危険を招来するのにどのような事態が起こりうるかを、その性格に着目しながら適確に認識することである。

そこで、このような見地から事態を眺めると、企業の内部要因によるものと外部要因によるものに大別できるであらう。まず、内部要因によるものとしては、例えば、大規模な施設事故、資金や資材の調達上の重大な障害、長期に亘る深刻な労働争議、業績の悪化、異常な人手不足、新規事業の遂行や新製品の開発の失敗、大口取引の受注の失敗、技術開発や経営合理化の立ち遅れ、企業秘密の漏洩、役員その他の経営幹部や従業員による背任、横領、贈収賄などの犯罪行為や反社

会的な妥当性を欠く営業活動とこれらに関する株主などの代表訴訟による追及、経営幹部が被る不測の事故、それに関係会社、親会社、下請会社にこのような事態が発生したことなどをあげることができる。

次に、外部要因によるものとしては、戦争や内紛などの社会不安の勃発など広汎な社会秩序にかかる要因によるもの、天災地変や気候不順などの自然的な要因によるもの、議会解散、総選挙、政権交代などの政治的な要因によるもの、投資や貿易などをめぐる環境の急激な変化、為替レート、株式などの市場価格、公定歩合や資源エネルギーの需給関係などの大幅な変動その他景気の著しい変動などの経済的な要因によるもの、いわゆるカントリー・リスクや海外派遣駐在員の誘拐殺傷事件の発生、電力・ガス・水道や通信施設・交通機関の事故、長期に及ぶ公共的機関の争議、ハイジャックや過激派のテロ行為、コンピューター関連の事犯、デマや誤報などの流布、流行病の蔓延などの社会的な要因によるもの、取引先の倒産や業績不振、大口取引先の取引停止、値下げ競争の激化、競争企業による有力製品の発売、有力企業の業界参入、業界内の合併や再編成、他社による株

式の大量買い占めや乗っ取り行為などいわゆる敵対的M&Aなどの業界に関連した要因によるもの、公害環境問題や関係住民との紛議、消費者保護や知的所有権をめぐる紛争、製品事故や関連する製造物責任問題、他からの告訴告発、暴力組織や右翼団体などからの脅迫やテロ行為、市場開放その他貿易の公正さをめぐる論議や摩擦への対応などの諸問題、法意識ないし法制の相違による紛争係争などの紛争に関連した要因によるもの、民商法その他の基本法、行政諸法、税法、独禁法、大店法、不正競争防止法、景表法、知的所有権関係諸法などの経済諸法、環境保護や消費者保護の関係諸法、製造物責任関係の法規制などの立法や法改正及び法制度改革などの法的な要因によるものなどが考えられるし、これらは、国際的な領域で起こるものもあり、国内的な領域で起こるものもある。

このような企業が当面する危険な事態は、以前におけるような単なる例外的な異常事態ではなく、すでに企業が存在し続けるために避けることができない常態的な実体自体となっており、従ってこれに対処する適確な認識と管理の実行は、企業の社会的責任となつて来ている。これらの事態に共通する特性は、社会経済

が国際化し、経済がソフト化し、企業経営が多角化していることを背景として、その原因が常に日常の中に潜在していること、その性格が多様で専門化していながら発現は総合的であって、一般社会に存在するあらゆる側面をほぼ全面的に帯有し、いったんその処理を誤ると巨大なリスクを発生して企業の根幹を揺るがしかねない危険を蔵している点であろう。そこで、このような事態に対応するいわゆるリスク・マネージメントを充足するために、多くの企業は法務部その他専従の担当部課を設置してその充実をはかっており、作業の性格も、かつての事後事務的な処理から予防的処理へ、さらには戦略的処理へと変革しつつある。そこでは、企業の各層各面におけるいわゆるリーガル・マインドの全社的な浸透と、各論的処理機能の構築が急務であることはいまでもない。いずれにせよ、正確で豊富な情報を早期に蒐集し、分析し、管理し、集積して、その広汎な活用をはかること、事実上及び法的の各面における処理組織を分化し充実して、その総合的な機能の確保をはかることなどが、現実面における処理の指標となるであろう。なかならず、これらの事態のうち、法的な要因によるものやその処理に法的な要

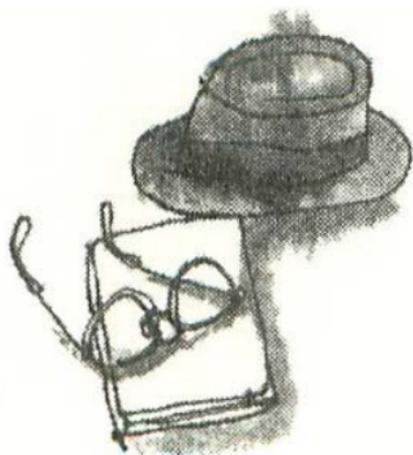
素を必要とするものを法的危険 (Legal Risk) として把握し、その集中的管理をはかるため法務部の充実に注力しようとする傾向が強まっている。ただし、このような対応こそが、会社役員、経常幹部、従業員による巨額の特別背任、横領、贈収賄の存否とか、会社役員による会社の業務執行の違法性や不当性の存否をめぐる論議と、これらを追及する刑事事件や株主の代表訴訟、容赦ない敵対的M&A、国内外の企業からの特許その他の知的所有権にかかる巨額の係争、公害や環境にかかる大規模な住民との紛議、製造物責任や消費者保護にかかる法的追及など、不特定又は多数の地域住民、消費者、株主、第三者などからの戦略的意図を含む大規模で執拗な法的要求などが、後をたたないどころか、今後ますます増加の一途を辿っている現実に徴するとき、このような事態に適応する最も適確な手法であるからであろう。

周知のように、かねてより、企業は前述のようなその存在の客観的条件の激変に伴い、個人と同様、改めて原点からその存在意義自体を問い直すべき幾多の社会的課題を課せられていることが論じられている。そして、単に営利を追求する

だけではなく、株主、従業員、取引先その他の関係者や、地域社会から国際社会に向けて、人間社会の福祉に貢献すべき社会的責務を基本的に負っていることが指摘され、私どもは、企業の活動の社会におけるあり方も、このような見地から、あらためてロータリーの「サービスの理念」に基づいて、根本的な検討と対応がはからねばならないものとして来た。ところが、さらに進んで、経営自体について右のような複雑な危険に当面していることが企業の常態となつて来ている以上、恒常的にこれらの事態を把握して適確に対処し、予想される経営上の各種の障害をあらかじめ予防し、或いはすでに発生したこれらの障害を速やかに解決し解消して、事業の本来的遂行とその成果を確保することが、企業としての社会への貢献を効果あらしめるため避けて通れない方途となつて来ているといふべきであろう。また、その対処の方法自体も、目的のためには手段を選ばずといった無定見のものではなく、「サービスの理念」を中核とするロータリーの精神に準拠した適正なものであるべきことは、いうまでもない。こうして、このように増加し深刻化してやまない経営の危険要因への対処自体が、ロータリーの「サービ

スの理念」に沿った企業活動のあり方に、新たな充実と変容をもたらすべき現代
的課題となつて来ていると考えるのである。

（一九九二年九月）



奉仕の現代像への幻想的考察

年間数百億ドルから千億ドルを超える貿易収支の黒字を累年継続計上してやむことのない日本経済の驚異的体質とその成果は、世界の人々にとつて、日本はもちろん世界のいずれの国においても、歴史に前例をみない異常な経済的初体験とすらいふべきものであろう。従つて、多量の資金の環流を行うための何らかの合理的な施策が計画的かつ組織的に実施されない限り、著しく均衡を欠いたこのような富の大規模かつ継続的な一国集中を漫然と放置しておけば、早晚世界経済の全般的破綻を招来し、我が国の経済自体も、結局はこれと運命を共にせざるをえないこととなるであらう。しかるに、我が国が現在行っている借款の供与とか援助の提供とか或いは投資の実行といった手法は、質量共に目先の対症療法的な措置にとどまっているし、また、内需拡大策なども、結局は弥縫的措置の域を出な

いほか、国民の健全な精神生活や日本経済の生産性の保持との関連においても幾多の基本的問題を含むもので、いずれも確たる統一的理念を欠き、事態の根本的な解決とはなっていないと考えられる。

もつとも、第二次大戦の壊滅的打撃から立ち直るため目前の課題にとりあえず取り組むことにのみ専念してこれに終始するにとどまった結果、その努力に引き続き伴うはずであったこの絶大な今日の成果を事前に殆ど予測することができず、ましてやこれを受け入れるための基本発想や制度をあらかじめ研究検討して準備することに想到できなかったこと自体は、ある程度はやむをえないことであつたかも知れない。しかしながら、このような受け入れ態勢の不備と立ち遅れにより発生すべき事態、例えば、土地その他の財貨の跛行的高騰に伴う富の格差の無制約の拡大や、労務対価の騰貴に伴う相対的人手不足といわゆる経済の空洞化とか、国民の有形無形の価値観と社会意識の変質と混乱、ひいては経済体制自体の自壊に至るまで、このまま推移した場合に私どもが陥るべき社会的経済的事態が極めて深刻なものとなる慣れは、確実に予想されると思われる。

そこで、私は、このような事態を避けるために不可欠な資金の組織的環流という課題を、一定の目的と明確な計画のもとに貿易上の収益を組織的に逐次開発途上国の開発資金にあてて行くことによつて解決する以外に方法はないと考える。

それも、単なる資金の供与という金融上の措置だけでは不十分である。相手国が主として資源と労力とを提供し、我が国が主として環境対策を含む総合的計画の下に資金と技術とを提供するとともに、教育文化の面においても人的側面を含めて一定の協力と寄与とを行い、その成果を両国があらかじめ適切に予定した基準に従つて配分することを主たる内容とする国家間の継続的で互恵的な開発提携契約を締結して、相互の履行をはかつて行くこととすることが不可欠である。この場合、相手国が必要とする開発の程度は、その民族の資質の傾向、気候風土や環境的社会的諸条件の状況、資金、資源、技術、教育の程度等の多種多様な要因によつて定まるものであるから、あらかじめ各方面に亘る調査分析と集約とを行つて契約の要件を幾つかの類型に整理分類し、その中から相手国の状況に応じて適切と認められる契約類型を選択して実施することとする。さらに、これらの本体

的施策と並行して、一定の付随的措置も必要となるであろう。例えば、必要資金の確保と巨額資金の過剰流動による弊害の防止に資するため、貿易に伴う収益のすべてを国が一定期間その預託を受けることとし、その収益性の保障として当該期間一定の利息金を預託先に支払うとともに、税の一定の減免を行う税制上の措置をとること、多数の国家間契約の締結とその実行に伴い形成される一定の広域経済圏が米国やECなどの既存先進経済圏から自立して成立することに伴い、両者の共存に必要な調整を行うこと、圏内部の秩序を維持し、外部からの干渉や妨害を排除してその実効性を確保するための自衛手段をとること、などがそれであろう。また、このような施策と措置の主体としては、国が直接これを担当することが理想であろうが、場合によっては、多種多数の企業や公私の団体によって構成される網羅的な公益的団体の主宰や参加、さらには国とこれらの団体の両者による共宰などが適当とされる場合もあり得ると思われる。

このような施策と措置を講ずれば、我が国に集中し偏在する多量の資金を有効かつ生産的に世界に拡散し環流させ、多数の相手国集団の多角的かつ広域的な開

発の推進に寄与しながら、さらにその教育文化面における進歩の実現にも資することとなり、均衡と安定とを伴った世界経済の着実な全般的進展を期待することができるとなる。また、我が国の経済自体も、物心両面に亘り、長期的に均衡と安定とを伴った成長を確保することができることとなる。そしてこれらの成果が相俟って、我々が目下獲得し保有しつつある有形無形の民族的活力を、内外を問わず将来に亘って人類の一般的福祉のため提供することができることとなると思われる。

ここで翻ってロータリーの世界に眼を転ずるとき、ロータリー自身が直接このような施策や措置をとることはあり得ない。しかしながら、我が国のロータリアンが国際社会に対して果たすべき奉仕活動は、今やこのような我が国経済の現況や課題とその世界経済に果たすべき役割を離れては存在しない状況に立ち至っており、このことは何人も否定できない現実となっていると考える。従って、私どもが、色々な角度から我が国経済が世界経済との関連において帶有する現代的課題にたゆまない省察を加え、その解決のため必要な具体的手法とのあり方に徹底

した検討を加えつつ、その成果を現実の奉仕活動に適確に反映させることを通じて、国際的相互理解の促進と世界平和の確保に資するよう努めて行くべきではないかと考えるのである。

(一九八九年一月)

今後におけるロータリーの存在意義についての

一つの意見

私どもは、私どもの存在のあり方を検討するにあたって、資本主義や自由主義、或いは共産主義や社会主義といった考え方のいずれが適切であるか、また、その手直しが必要とすれば、どのような考え方で対処すべきであるかなどの論議に、多年に亘り埋没して来た。その必然的な結果として、私どもの社会生活やその管理が、このような経済的要素を決定的な前提として策定され運営されて来ることとなったといつて過言ではないし、さらに、私どもの知的所産の最高の成果と称される科学がこれに参入して経済と手を携え、この両者の相乗効果が、私どもの社会のあり方の大半を決定して現時に至っているといつても、過言ではない。しかしながら、経済や科学は、私ども人間にとつて、その生存のあり方を決めて行く上で非常に重大な要素であるとはいいいながら、本来は存在の外的条件の域

を一步も出ないものであることは、いうまでもない。人間の存在の価値は、結局において、その内的な精神的な内容によって決定されるものである。人の内的存在が豊かになるためには、人を取り巻く経済や科学の成果が良好なものであることは有利ではあるが、逆に、経済や科学の成果がいくら良好に集積されても、それだけでは、人間の内的な成果を創り出し生み出すことは不可能であろう。そして、私どもは、社会主義の体制が崩壊した後における世界の政治、経済その他社会全般の騒雜な現状を眺め、また、いわゆるバブル経済とその崩壊後における我が国の政治、経済その他社会全般の惨憤たる状況を眺めつつ、私どもの人間社会における経済や科学が機能する限界の現実を、いやというほどに今思い知らされているのである。

ロータリーは、沿革的な見地からマクロに眺めるならば、アメリカの資本主義経済の発展に伴う各種の弊害を素直に認識しつつ、「サービスの理念」という普遍的な精神的価値を社会に呈示してその認識と理解を求めることによって、これらを是正し修正しようとした精神的努力としての側面を色濃く帯有しており、そ

の性格は、現時に至るまで、歴代のロータリアンによって脈々と受け継がれて来ているのではないかと思われる。ただ、現時の世界にあつては、私どもの色々な活動の総体が人間の心的容量や地球の物的容量の限界に近づきつつあるのではないかとの指摘がされているようである。そして、いわゆる欧米的資質の無制約な開発がその主な原因ではないかということが併せて指摘され、その延長線上において、私どもの社会が経済と科学という二つの大きな要素によつて余りにも多く支配され過ぎているその現実のあり方自体に、根本的な批判と検討の目が向けられ始めているようである。

一体何が故に、私どもの社会はこのような現状に立ち至つてしまつたのであるか。まず、西欧的資質、なかならず客観的な知能や科学という名のその自然への適用としての合理的資質が長年月に亘る宗教的試練を克服し、文芸復興を契機として開花し、次いで、これがいわゆる技術として具体化し、さらにこれが産業革命を起点とする各種の近代的な生産手段ないしは生産活動として欧米社会において機能的に結実し、そのような流れの集約としての資本主義やその抜本的な批

判や対案としての社会主義並びにその各修正形態などをめぐる経済的視点と体制が総合的に成立して世界に波及するに至ったという歴史の経緯は、私どもがすでに等しく理解しているところである。経済と科学による社会支配の現状は、このようなある程度の必然を伴った人間社会の歴史の流れの中に結果しているものであろうが、私どもは、今やこのような現実で多面的な観察と評価を加え、さらに、果たして人間の存在が経済と科学のみによってその大半が規定されるようなものであるのかどうか、そのようなものであつてよいのかどうかの点に、あらためて深く思いをいたさなければならぬのではなからうか。

このような観点からロータリーに光をあててみれば、或いはロータリーは、私どもが科学を伴った経済をその大半の実質とする資本主義的な社会に生きることとを当然の前提としてその弊害の除去ないしは軽減に努めるといふ従来の歴史的使命を、すでに終えつつあるのかも知れない。そして、ロータリーは、経済と科学の蔭に覆われて稀薄化した人間の内的存在の価値への意識を高めつつ、その掲げる人間の社会性の真の認識に立脚した普遍の真理「サービスの理念」が帯有する

精神的価値を、必ずしも社会経済体制の如何に拘泥することなく、より一般的な立場で、私どもの社会意識の中に深く広く浸透させるよう努力して行かなければならないのではなからうか。

競争を始めとする人間の資質一般への外的な制約は、いずれにせよ健全な社会の形成と維持と発展のためには相当程度不可避であろうし、科学は今後とも引き続き無心のまま存在を続けるであろうが、私どもは、このような人間の存在の諸々の外的条件を、単にやむをえないものとして他律的に受け入れるだけでなく、進んで自分の内からこれらの外的制約を積極的に理解し精神的に支えて行くよう努めることが、今後合理的な制約の中で本格的に社会の活性化を実現する所以であり、これに応えて行くことこそ、今後のロータリーに与えられた新たな使命と課題ではないのではなからうか。そして、ロータリーの果たすこのような努力こそが、私どもの職業が私どもの社会や私ども自身が生存して行くための否定することのできない本来的な基盤であることを真に自覚して人間社会の根本的な倫理化を進めつつ、世界の政治、経済の大きな壁が取り除かれた今日以降において

際社会全般に存在し発現する本来的な各層の社会条件上の障害を克服し、人々相互の理解と親睦を通じて地域社会から国際社会に至るまで社会の全般的な福祉と平和を実現して、私どもの社会自体と私ども個々自他の幸せを実現して行く所以であろうと思うのである。

(一九九二年九月)

(著者略歴)

菅生 浩三 (すごう こうぞう)

1926年10月生

1952年3月 東京大学法学部卒業

1954年4月～56年3月 神戸地方裁判所、同家庭裁判所判事

1956年4月～ 弁護士として弁護士会の役職ならびに
数多くの企業と公私の団体の法律顧問を務める

1969年2月 大阪北ロータリー・クラブ入会

1987年～1988年 同クラブ会長

1991年～1992年 国際ロータリー第2660地区(大阪府
大和川以北) 地区ガバナー

1993年4月24日 初版節1刷 発行

2007年5月18日 初版第4刷 発行

著 者 菅生浩三

発 行 所 株式会社出版文化社

〒540く0003 大阪市中央区森ノ宮中央1丁目14く2

TEL06く6941く132H代) FAX06く6941く167I

Eくmail book@shuppanbunka.com

発 行 人 浅田厚志

協 力 朝日カルチャーセンター

印刷.製本 株式会社デジタルパブリッシングサービス

電子文庫版「ロータリー随想」について

この「ロータリー随想―その周辺とともに―」は、菅生浩三元RI理事（2002―04）により、一九九三年に発行されたものです。一九九一年四月から一九九二年九月にかけて「ロータリー随想」の標題のもとに数冊の小文集に取り纏めたものに若干の手を加えたうえ、一冊の本に纏められました。

オリジナルの書籍の帯で「個人と社会とを　ロータリーのサービスの理念で結ぶ　ロータリアンが綴る珠玉の小編集」と紹介されています。

六つの章からなり、四一の項目にわたりロータリー全般について述べられています。

今回、菅生氏のご許可を得、この書籍を電子文庫化することが出来ました。出来るだけ原本に忠実にと作成しました。ぜひ、ご精読ください。

なおこの書籍は1993年4月に発行され、2007年に4刷が発行されています。

ます。

またこの「ロータリー随想―その周辺とともに―」の続編として、「続・ロータリー随想」1996年、「新・ロータリー随想」1999年、「再・ロータリー随想」平成16年の三冊が発行されています。

ロータリー随想 - その周辺とともに -
菅生浩三

1993年4月 初版 発行

電子文庫発行 2007年8月